

---

# 天の邪鬼と猫かぶり

陸一 潤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天の邪鬼と猫かぶり

### 【Nコード】

N0680P

### 【作者名】

陸一潤

### 【あらすじ】

「ボクは落ちたんじゃない！落とされたのさ！」

11月中旬の、冬も近い秋のある日のことだった。

歩道橋から落ちた女子高生と、目撃者の五人の学生達。変人幽霊に取り憑かれた目撃者の一人、藍は、彼女の犯人探しと謎の少年の復讐劇に巻き込まれる。

歩道橋に居たのは、猫かぶり、天の邪鬼、人魚の少年、赤毛の不良、青いランドセルの女の子……そして、魔法使い。

ミステリーで青春でファンタジーでオカルトな憎愛劇……？通称猫鬼。

(ブログでは完結しています…<http://ameblo.jp/ume-6/>)

## ブローグ

まあるいあの月が、ボクの目になる。

こんなことを、つい数分前の自分は夢幻にも思わなかっただろう。

頭上高く彼方に浮かぶあのマルは、ほんのり銀に浅黄を滲ませ、蒼の中に佇んでいる。それは365日変わらずにある不変の日常だった。今日は運よく雲ひとつない快晴。秋晴れだ。

急速に昼が短くなっていく西日が目に痛い午後4時。

ボクは落ちた。“落とされた”。あの空へ、確かにボクは一瞬で、叩きつけられたのだった。

その日は朝から違和感があった。

体が不調というわけでもない。例えば、そう『何か』足りないよ  
うな、かと思えば『何か』がそこにあるような。

増えているような、減っているような。そんな違和感だった。

母が掃除でもしたのだろうか。

違和感を最初に感じたのが、自宅であつたためそう思ったのだが、  
どうも違う。見慣れたはずの通学路でもそれは感じた。学び舎の自  
分の席に座っても。

（何か違う）

その時、視界の端に“何か”映つたような気がして、彼 坂  
城藍は首を回した。チャイム間際の朝の教室を舐めるように見渡す。  
隣の席で、ついでに名前順でも隣の坂上が、何かと見てきたので  
すぐやめた。

違和感は消えない。

そうだ、心霊写真を見たときに似ている。ふと見て、『あれ？』  
というこの感じ。

その様子を、上から見ていたボクはといえば、あまりの退屈にま  
た死にそうになっていた。

退屈は人を殺すというが、その通りだ。欠伸が止まらない。

そうすると、あら。やっぱり彼は自分を認識しているのだろうか。あちらも欠伸する。

欠伸が移るのは、条件反射のようなものだという。場を共有しようという、人間の反射。さらにいえば、欠伸

が移りやすい人は優しいお人よしだとか。

無意識かな、たまにボクを視線で追うのだ。ボクが動くと、彼の視線も付いてくる。それがまるで、親の姿を追う何かの雛のようで。

そつと、彼のひよこ色の頭に、手を伸ばしてみる。

いやあ、やっぱり柔らかい。うん、予想を裏切らない男である彼は。

『ん？』

悦に浸っていると、目の前に大きく、綺麗な色の瞳。おお。

『こんにちは?』

小首をかしげて言ってみた。

『やあ初めまして。君に取り憑いている者だ』

引き攣った短い悲鳴が、朝の教室にキンと響いた。

## <語り部さんのはなし

人は言う。『さて』という言葉は、物語を始める上で、とても大切な魔法の言葉であると。

語り部を名乗る者は『さて』の言葉から始めるべし。はてこれは名探偵の定義だったろうか。

さて、これから語りますのは、いたって普通の学生らが、魔法使いに会ってなんちゃら、というなんともチープな物語である。世界探せば、こんな物語はいくらでもあるだろう。最近はあるが盗作やら、どここの著作権やらうるさい時代だ。王道、というものもある、それに言い換えてもいい。ようは、これは一つの物語としてはとても有り触れたものであるということだ。

しかし普通も普通なりに、個性や考え方があるものだから、もしかしたらセオリー通りには行かないかもしれないが。

ようは見方である。ボクもある面ではとっても普通。ただの高校生だ。青臭くちよつと馬鹿で、その時楽しければ満足できる。

しかし、そうはうまくいかないのが世の中だ、というのはどこかのお偉いさんのお言葉である。

ボクらは大人に憧れる時はもう過ぎた。それは、大人もボクらと大して変わらないんじゃないか　　？つて、気づいちゃったからなんだよね。

少年よ大志を抱け！でもその大志に致死量を超えた多大な毒を含んでいた場合、ちよつと早くに生まれちゃっただけのクラーク博士達は、はたして責任をどこまで取ってくれるんだろうか？



半円を描くように蔦が絡むデザインの青銅の門は、この高校の象徴ともいえる存在だった。

私立の女子高。偏差値はそこそこ。

語学に強く、就職よりも、その筋の大学への進学のために通うような学校だった。高校卒業資格が欲しいだけの生徒はそうおらず、海外への留学生なども年に数人はいる。歴史は五十年ほどの、地元では名門校だ。

お洒落にうるさい年頃の女の子が通うのだから、制服も紺のセーラーとシンプルながら、シルエットが綺麗で、さらに細かい刺繍が利いていて可愛い。

そんな学校の象徴である門は、雨にも風にも台風地震、雷にも負けず、どつしりと女学生たちを迎え、見送る。

無言で佇むその姿は、まるでこの生徒を象徴しているようで、梓はそのターコイズブルーの柱の横で姑の世話に疲れた嫁の様な溜息を吐いた。

季節は十一月も半ば。門の両脇に植えられた桜の紅葉が、ちらほらと舞う。

クラス全員の顔も覚え、それぞれのキャラクターのイメージが固まり、団結力と言うものが生まれてくる。そんな季節である。

それに加え、秋と言うのはイベント事が多い。文化祭に体育祭、参観授業もあれば席替え野外実習授業、テスト……。

秋は憂鬱だ。

長期休暇以外のアルバイト禁止のこの学校で、お小遣いも夏休みで出尽くし、あとは年末お年玉を待つばかり。

梓は小さいころから物語が好きだった。その多くは、童話もしくは児童文学である。

この世に生を受け16度目の秋。

夢に飛び込んだアリスではいられない。悠長に、兎なんぞを追いかけるわけにはいかないのだ。

スーザンほどすっぱりナルニアを忘れることは出来ないが、だからと言ってアンドルーおじの様に、土に植えられるわけにもいかない。そんなことをしていたら、象に光合成を求められる羽目になる（それなのに。嗚呼、それなのに・・・）両手で顔を覆って泣き崩れてみるべきか。否、したくても出来ないのだが。

時間は事が起こるより、少し前のことだった。

学校からの帰宅途中。五間目で終わる水曜日。繁華街を横切る駅前。そして歩道橋の上。東の蒼と西の橙、わずかな光の瞬き。すれ違う人。

ボクは盗まれたのだ、きつと。

さて、その時、歩道橋に居たのは五人の学生だった。それぞれ面識などは無い。ありふれた、年齢もバラバラな五人の学生である。時刻は丁度、午後4時ごろ。少しずつ下校途中の学生が零れてくる時間。

眼鏡の女子高生は歩道橋から落ちた。

金髪に蒼い目の男子中学生はそれを見た。

もう一人の蒼い目の少年はその場を何事も無かったかのように離れた。

蒼のランドセルの女の子はそつと下を覗き込んでみた。

赤い髪の不良は慌てて歩道橋を駆け下りた。

これはハッピーエンドをより盛り上げるための神様の仕打ちか。それとも頭の浮ついた近頃の餓鬼をシメるための断罪か。

それならばなぜ自分達なんだと、声を大にして叫びたい。しかし残念、彼らは魔法使いに選ばれてしまった可哀想なクソガキ達だった。

・・・さて、その日魔法使いは、子供を集めて呪いをかけたのだった。

## 坂城 藍：天の邪鬼

彼は大層なネガティブである。

まだ丸みの残る輪郭に、長い金色のまつ毛、高級磁器の様な肌、名の通り濃い藍色の瞳、桜色の唇ときたら、もうこの御国の王子様？と、言いたくなるような容姿である。

性格も、この年頃の男の子にしては気配り上手、基本的に自分がされて嫌なことは絶対にしないことを信条にしている。世で言ういわゆるKY人種とは対極に位置し、臆病なほど、周囲の確認を慎重に行う。

そんな彼の唯一の欠陥と言えば、そのネガティブに他ならない。

いつでもどこでも『最悪の事態』を想定するのである。それは人の心にも言えることで、目の前の人物が“もし”今の言葉に傷ついていたら、を手始めに、？もし“この人が自分を嫌いなら、となる。その結果として、彼は常に頭の中で『自分』、『他人』の二つの力テゴリを作り、言動の選択肢の仕分けを行っているのである。

これはモノによって対処が違う上に、不要な部分を削ぎ落とそうとすればするほどに果てのない、大変疲れる作業なのだ。しかも常に情報の整理が必要なため、持ち場を離れることを許されない。過酷な労働である。

若干十四歳にして、坂城藍少年がこうなってしまったのは、前述のその容姿にある。

彼は金髪碧眼であり、戸籍上は日本人だが、その体に75%流れるは西洋フランスの血だった。父はハーフ、母にしては、パリに住ん

でなかった純粹なパリジエヌ。つまりフランス人。

純度75パーセントといえば、チョコレートならばびっくりの苦さ。彼はその味を恐れているに他ならない。

日本人の多くは、黒髪に茶の混じった黒眼だ。義務教育も終えれば、髪色を変えることもあるだろうが、残念なことに彼の周囲はまだ幼く、生まれたままの黒を保っているのが大半である。

外見の不一致は、つまり第一印象が固定されやすい、ということになる。彼は人間関係において、最初から第一印象を捨て、自分の立ち振る舞いを見せてからの第二印象での対人間関係の勝負を賭ける。その末の、あのネガティブという名の保険だ。

彼の父は何故だか日本の地で、日本人ではない母を見つけ、選び、結ばれたのだから、最早因縁としか言いようがない。

『そりゃ君は先をちよつと子供らしくないけどさあ、大丈夫だってハタチ過ぎれば天才も普通の人だよ』

身も蓋もないことを、幽霊は眼を細めて藍の頭の後ろで言った。

「・・・山崎さん」

声色で、勝手に頭の中を覗くな、と抗議する。

『混乱の原因』『不可解な状況』の最たるもの。貼り付くように、一定の距離から離れないこの幽霊。

肩に付くほどの黒髪の大人しそうな外見に、真っ赤な眼鏡を掛け、紺色の制服を纏う。どちらかといえば図書館に居そうなお姉さんなのだが、藍は彼女に出会って三日。すでに多大な苦手意識を持って

いた。

『ボクは君に取り憑いてるんだ。一寸だって離れられない。いいじやん現役セーラー女子高生が取り憑いてるんだよう？響きだけでいいくないかい？』

「セクハラですよ」

『難を言えば、君がボクより可愛いことだね。なんだいヒロインより可愛い主人公。攻略されるのは男の娘おとここ、なんてシユール』

彼女に話は伝わらない。くると幽霊は空中で風船のように弾んでターンした。ひざ丈のプリーツスカートの中、足が丸見えになったが、太ももには体操着らしいハーフパンツが顔を出している。

『ボクなんてさあ、老け顔だから制服姿だとAVに出てきそうだとかわれるんだよね。』

失礼しちゃうよね、眼鏡は眼が悪い人が使う道具だよ？そういうもの見て、そういうこと考えるからそう見えるんだよ。眼鏡は耳にかけるもんさ。それ以外何をかけるってんだ、って話だね。精神的不衛生極まりないよねえ君はどう思う？』云々。

今度はその場に寝そべり、退屈した子供の様に、無意味に手足をばたばたさせるこの女。

（色気も何も無いな）

幽霊の名前を山崎梓という。少し前まで現役女子高生だった年上の女の子だ。

十一月上旬のあの日。午後四時ごろ。下校時に通学路にある歩道橋の上、そこから彼女は落ちた。

駅前的大通り。事が起こったのは夕方だったが、高速道路も一キロ先にあり、歓楽街も近いその道は、夜でも車が絶たないほどの大きな道路だ。落ちた彼女の体は軽自動車に一度跳ね飛ばされ、そして対向車線を走っていたもう一台に下敷きにされた。

『いや、あれは潰された、と言うべきだね』と梓は言う。

つまり坂城藍は、彼女が幽霊になった瞬間を見ていた“目撃者”と“被害者”の関係である。

『ああ、到着到着』

梓の声と共に、藍は自分の席にどさりと鞆を置いた。置き勉をしない主義らしい藍の鞆は、実に重量感のある音をたてた。

藍の通っている学校は、いたって普通の公立中学校だ。教室は下駄箱にも購買にも近い一階、旧校舎とも言われる北校舎の角。冬はまだしも、窓の上にケヤキの木がかかったこの教室は夏には涼しく、好立地好物件である。

ただ難なのは、旧校舎と言うだけあって、薄暗い雨天の夕方などは大変に雰囲気があるというだけか。

『知ってる？ケヤキって木によって紅葉の色が違ふんだよ。この木は見事に真っ赤だよ。うんいいよね赤は。魔性の色だね。ボクのラッキーカラーなんだ』

藍はそれを見した。しかし彼女は、最前列右端・廊下側の藍の机に腰掛け、ぺらぺらと独り言を話している。

それは、何が好きでこれが嫌い、というような自分自身のことと、生活にこれっぽっちも役に立たない雑学だった。聴いているかどうかは、もはやどうでもいいらしい。

『ねえ浅黄色って知ってる？新撰組の羽織の色なんだけど』

秋も深く、ケヤキの紅葉が窓の外を彩る。人のまばらな教室で藍は考えに伏せた。その梓のことである。

さて、事故は一瞬に起こったことであり、藍自身はその歩道橋で梓の斜め後ろ五メートルほど先に居たにも関わらず、実のところ落ちた瞬間もその後も、彼女がどんな状況だったのか。よくは見えない。

落ちた彼女に真っ先に駆け寄ったのは、彼女と同じ高校生らしい年頃の青年だった。学校をサボっていたらしい彼は、私服姿で真っ赤に頭を染めたいかにもな不良だったが、誰よりも早く階段を駆け下り、逃げようとした運転手をとっ捕まえて、救急車を呼ぶよう指示した好青年だった。

藍自身と言えば、クラクションの音、不良少年の「逃げんなデメエ自分がナニしたか分かってんのか！」という怒声と、他の目撃者の「人が落ちた」の言葉で、ようやくと状況を把握した。

そんな自分に、何故、彼女が自分に取り憑くことになったのか？

藍は寺の息子だ。当然、父も葬式等と呼ばれることもある。藍自身も手伝いに駆り出されることだって、小学校のころは結構あった。そう少なくない檀家さんの名前も頭に入っている。

経験として、御遺体を見たこともある。

しかし心霊、幽霊、というものは、もしかしたら、一番縁遠かったのかもしれない。供養の心は染みついているが、藍は幽霊の存在を信じていなかった。梓が初めてだ。



成仏させてやりたい、とは思う。だが、梓は藍の持つ幽霊のイメージからは一線を画していた。

とにかくうるさい。さらにいえば、すごく邪魔。ふとしたときに怒鳴りたくなることも少なくない。

そもそも本人に、まったくその気がない。

最初は再三、言ったのだ。「この世に未練でもあるんですか？」

「出来ることなら、何か協力しますよ」「言ってみてください」

今となっては、そんなチープな台詞を吐いたことが恥ずかしい。

藍はとうとう、梓に『成仏』を促す言葉どころか、とりあえず自分から引きはがす言葉しか掛けなくなっていた。

## 西藤 凜：人魚

さて、梓といえば、藍のことを、悪い意味でとても気に入っていた。

梓にもなぜこうなったのか。それが多大な疑問だった。しかしそれを上回るものが今あるのだから、それはいい。

つつい反応が面白くて苛めてしまっが、彼とはまるっきり初対面である。確信がある。

何せ、目立つのだ。藍少年は。

黒髪の中の金髪、名前と同じ藍色の眼。顔立ちも将来有望。今は小柄だが、あと数年成長期が来てぐっと大人に近づいたらまだしも、まだ幼い顔は小さなころからそう変わっていないはずだ。

故に簡単かつ明確な結論。『ボクは過去の彼を知らない』

これがSFなら、時間旅行で未来の自分が過去の彼と、となるのだろうが、あいにく今は未来も何もあつたもんじゃない幽霊の身上。これ以上ミラクルは起こらない。

チャイムが鳴り、ノートを広げる彼の黄色い後ろ頭を見る。

事故から三日が経過している。

その間に分かったことは、坂城藍少年の生い立ち家庭事情、そして彼がたいそうに真面目ということだけだった。

真面目だからこそ、あれこれなんだろう。

自分がこの十六年の人生で、経験したことの無いことを彼は知っている。それを見つけたのが楽しい。しかし彼自身がその尊さ、偉大さ、稀有さ……とにかく凄さに気が付いていないのだ。藍は

自分をつまらない人間だと言うが、そうでもない。むしろ、梓にしてみれば面白くてたまらない人間だ。

梓から見れば変えられないのだから無駄なこと不毛なことだが、当人に見れば、変えられないこそ大切なこと、だ。

梓は問いかける。

ボクはこれが好き、これが嫌い。なら、キミの好きなもの嫌いなものはなあに？ 答えるもよし、答えないもよし。返事はなくてもいい。

せいぜいぐるぐる悩めばいいさ青少年、なんて思う梓もたいがい子供らしくない。

ああ、これだからボクらは引きあつたのかな。なんてね。

・・・と、考えているあつという間。暇で暇で仕方なくなるかと思つたが、意外となんとかなるものである。何せ考えるべきことは色々あるのだから。

凜は驚きに眼を剥いた。何が起つたのか、一瞬理解しかねた。

（人が落ちた）

人が目の前で落ちて行つた。

けたたましく響いたクラクションに人が集まってくる。

タイヤが道路を滑る音。

怒声。「逃げんなテメエ自分がナニしたか分かってんのかッ！おい！？」

怒声。「うるせエ轢くぞ！」

声。「人が落ちたって」「マジかよ」「やだあ」

下を見る気にはなれない。

どうしようどうしよう。ぐらぐらと頭が揺れた。

どうしたらいい。灰色のコンクリートの地面も揺れている。自分の頼りない細い手が見えた。それで眼を覆う。

これのせいだ。

セイレーン、という力があつた。

それは超能力の様なもので、しかし物理的にはまったく作用しない能力である。

そもそもセイレーンとは、ギリシア神話等に登場する、西洋の女の妖怪だ。女神だったり、半鳥半人だったり、怪鳥や、ただ単に妖婦と呼ばれたり、人魚としても知られている。その多くに共通するのが、歌声で人、特に男を惑わす姿である。

俺は十四の時に魔法使いに会った。

可笑しいとは思ってたんだ。だって俺は他とは違う。流石に十四年。うつすらとは気が付いていた。無条件に人に好かれる能力。よくよく意味を考えた。

……鳥肌が立たないか？ああ、吐きそうだ。

力は眼に宿るといふ。それは俺も例外ではなく、俺の力が一番大きく影響されたのはこの眼。

辺りが暗くなってきた。薄ぼんやりと、光。ああこれも俺の眼からだ。青白い対の光源。たいそう今の俺は不気味だろうな。

「……先ほど彼女は俺を見ていた。」

サイレン。救急車。音に誘われ、色めき立つようにギャラリーがさらに騒がしくなる。

「おい。オマエ、大丈夫か？」

ぐい、と強い力で脱力しきった肩を引かれ、凜はよろめきながら振り返った。

「わっ、ス、スマン大丈夫か？」

「……いえ」

「本当か？」

目の前に、いかにも不良、というような少年が立っていた。真っ赤な短髪は夕日のせいではないだろう。鋭い目つきをやや和らげて、少年は凜の顔を覗き込む。凜はその視線から逃げるように、前髪で目を隠した。

「体調でも悪いのか？まだそこに医者残ってるぞ。車の運転手の方が頭打ったらしいから」

よくよく見れば、彼は先ほど少女を轢いた運転手を捕まえた少年だ。

それに気付くと、凜は「大丈夫ですから」と、彼から距離を取った。

歩道橋を降り、重い足がふと止まる。

（……馬鹿みたいだ。あそこに居たってあったことは変わらないのに）

どれだけの時間、あそこで呆然としていたのか。明らかに空は暗くなっている。

事故によって起こった鉄の箱の群れと生臭く濃い夜の雰囲気を感じ、本当に気分が悪くなったような気がした。

俺のせいだ。

力は凜の人生を変えた。学校では孤立したし、両親はそんな自分  
を持て余してる。それはありありと眼に見えてわかった。魔法使い  
に出会ってからには特にそれは謙虚。

・・・もう、どうしたらいいかなど出てこない。

(・・・あの子に会いに行こうか)

混乱した頭が叩き出したのは、一番やってはいけないことだった。  
何を馬鹿なこと俺は・・・!

自分を叱咤する。今は駄目だ。今は。絶対に駄目なんだ。まだ帰  
れない。まだ。ギャラリーは増えてきた。遠くなるサイレンが耳を  
刺す。まだ駄目だ。会えない。

見つかるわけにはいかない。

じきに警察も来るだろう。そんな時、身元不明の男子中学生がウ  
ロウロしていたらどうする? どうなる?

離れなきゃ。

今は忘れるんだ。やらなきゃいけないことは他にあるだろう。や  
らなきゃいけないんだろう! 忘れる。忘れて、また終わったら思い  
出せ。今こうしている間にもあの子は。

・・・一時も無駄には出来ないのだ。

やれるのは俺だけだ。『セイレーン』、『人魚』の俺だけだ。  
人魚の呪いは人魚にしか解けないのだ。

『逃げんなテメエ自分がナニしたか分かってんのかッ!』あの高校  
生の怒声。まるで全て見透かして、今こうなっている自分に言われ  
たような。

わかってる。わかってるよ。わかってるから。優先順位だ。俺にはこっちがよほど大事なんだ。比べさせるな、頭が痛くなる。

彼女は可愛い妹。俺の理解者。

・・・俺はもう普通じゃないのは分かってる。全部終わったら少しはあの魔法使いに感謝しようか。

足なんて知らない。知りもしない誰かと同じじゃどうせ、妹は守れないんだから。

人魚は歩く足も、綺麗な声も、もちろん優しい王子という人間もいないのだ。ただ可愛い妹さえ幸せなら。

## 山崎梓：猫かぶり

彼女は自分以外に見えないことをいいことに、この幽霊生活をかなり楽しんでいる。その大半が、軽い体を生かした曲芸やちょっとした悪戯、子供の様なことばかり。高校生は大人ではないだろうが、しかし自分よりは大人に近いはずだ。

彼女は16。つまりあと四年で大人になればいけないはずの人間なのに。

（・・・ここは道を変えた方がいいのだろうか）

このままいくと、例の歩道橋を通らなくてはならない。放課後の通学路で、藍は悶々と頭を悩ませていた。

先を歩く梓は楽しげである。どうも道路に映る影を踏んで、一人遊びしているらしい。今ではそんな遊び、小学生だってそうしない。

ああ、またあの駐車場だ。

知ってか知らずか、彼女にとってこの道は、自分が命を落としたあの場所へ向かう道。どうなのだろう。怖くは無いのか。やはり避けた道を歩いてやった方が・・・梓曰く「真面目な」彼は、好かないはずの彼女について、その薄い色の眉をぎゅっと寄せて考えた。

（そうだ、やっぱり）

いつしか下がっていた視界が、少女の満面の笑顔で一杯になった。

『そうだ病院に行こう！』



彼女はそう言っ手て手をたたく。藍の心臓は急激に機能を速めて大量の血液を体中に送り始め、藍はとっさにその場で足を踏ん張った。「病院？」やっとな藍は訊き返した。

「どうしてまた」

『ボクの体が運び込まれてるはずだろ。ちよつとどうなってるか見てみたいんだ。嗚呼ボクはなんで忘れてたんだろ。自分の体を上空から見下す。なんていう幽霊特権！』

そして台詞は『起きなさいよ！私の体でしょっ』ふふふいいねえいいねえ夢だねえ』

彼女は楽しそうではあるが、忘れてはいないだろうか。事故から三日経過している。

「体はまだあるでしょうか。もうとつくに自宅に運ばれてるんじゃないか。……」

へたしたら焼かれてるのでは。

一瞬で行きつく考えに、すつと背筋が寒くなった。もし自分なら自分が居ないうちに、十数年間共にしてきた体が葬式に出され、焼かれ、灰になっていたとしたら、そうになったら、きつとどうしようもなく。……。

「行きましよう今すぐ！」

『ええ……。いいよ今度で』

彼女はそう言っ手て、心底面倒くさそうに髪を掻きあげた。『今度の休み、ゆつくり行こうよ。無かったら無かったでまあその時で』

これはぞんざいにするべきことではない。「良くないです。最優先事項ですよ」

力強く、藍は力説した。

『ははっ、難しい言葉知ってるねエイちゃん。中学生も恐ろしい』

ね」

「山崎さん、これは人の生き死にのTPOに関わることです」

『TPOで。ははっ、それなんか可笑しくないかい？』

「常識的に考えて、ってことですよ。今日行きましょう」

ぐいぐいとその背を押す。触れる背は冷たかった。この冷気は彼女自身の体がそうだからなのだろうか。なぜだろう。どうしようもなく悲しい。

『仕方ないねえ、藍ちゃんは』梓はそう言って他人事のように笑った。

鞆を部屋に放り込み、財布だけ持って家を出る。藍はバスか自転車で迷ったが、結局自転車の鍵を差した。

無言でペダルを踏むと、冷えた頭に先ほどのやり取りが思い出された。

(・・・自分のことなのに)

彼女は自分のことに無関心すぎるのではないか。

自分なら、と考えてみる。ある日突然死んだとして、どう思うだろう。

まず気になるのは自分の身。想い出、夢、将来。次に家族、友人いるなら恋人だって。(どう見てもいそうにないが) 全て彼女はどうでもよさげである。『めんどくさい』とまで態度で示す。

(・・・最初、彼女は何て言ったっけ)

最初に会ったのは彼女が幽霊になってから。事故の次の日だった。(急に、だったような気がする)

日常がなんとなく、違うなと感じた。昨日、あんなことがあったからだろうかと思った。

(・・・何て言ったっけ)

『ボクが最後に見たもの、何だかわかる？』

藍の後ろで梓が言った。どんな体勢かと信号待ちの時に見てみれば、後輪に座るようにして乗っていた。どうやってバランスを取っているのだろう。不思議だ。

『満月が見えたんだ。ほら、あの日満月だったろ？落ちる時に、空が落ちるっていうけどサ、まさにそれだった。ボク、一瞬自分の眼がああ月になったかと思ったんだ。』

梓の髪がなびく。この幽霊はたまに、まるで質量があるかのような様子を見せる。

紺と白のセーラー服。スカートはきつちり膝丈。四角い眼鏡はフレームが赤い。肌は意外に白く、眼はツリ目がちだ。ゆるく波打つ背まである髪は真っ黒。瞳は濃い茶色。

こうしていると、まるでどこぞの優等生だ。

『浅黄色って、わかるかい？』

『……新撰組の羽織の色でしょ』

そう言つと、梓は満足そうに背を丸めて笑った。

『……ボク、君に言っていないことがある』

梓は今までになく静かに語った。

信号が青になる。右足をペダルに乗せた。

梓は空を見上げていた。豊かな髪からちらりと見えたそれに、細い首だ、と思いすぐ目をそらした。

『いっぱいあるよ。本当に、たくさん』

語尾が灰色に溶けていく。

背中越しの物体は、やはり冷たかった。

最初、彼女はこう言った。

『やあ、はじめまして。君に取り憑いているものだ』。

自分にも生活があるわけで、藍は彼女が自分にまわりつくのを放っておいた。たまに、『本当に帰れないんですか』とやんわりと促してみる。それが三日続いた。

（僕は、本当に頑張っただろうか）

ただ、邪魔だからという理由だけで、彼女をぞんざいに扱わなかったか？

三日間はいつもと変わらず短かく、いつも通り緩やかな弧を描いて、陽は空を廻った。

何かが抜けている。藍はそう感じた。彼女は、何かが足りない人間だ。

それが情なのか、それとも他の何かか。まるで子供だ。興味では無い。藍には三日間共にした人間のことを、こつも何一つ分らない、そのことに抵抗があった。

梓は自分が今まで出会った中で、一番不可解な人間だ。そう思った。そして、もう少し彼女に付き合おうとも。

梓について語ろうと思う。前述の通り、彼女はファンタジー小説が好きな私立の女子高の生徒だった。

それなりに、将来についての夢もある。そのために彼女は、あの語学が豊富に学べるあの高校を選んだ。

家はまったく普通の家庭。はっきり言ってしまえば、就学生制度を使用せずにこの私立に通うというのは、かなりの負担である。何せ名門私立、三年間で五百万ほどの金がかかる。まだ十代の梓にはまだまだ縁遠いと思っていた、くつきりと浮かび上がるリアルな数字だった。

しかし一人っ子長女と言う期待もあってか、彼女は念願叶ってこの学校に通うことが出来た。

十一月も半ば。入学して丁度半年を切った。金欠に喘ぎながらも、親しい友人と楽しく毎日を過ごす。勉学に励む。学校では学校の山崎梓。家では一人娘で長女の山崎梓。

梓はそして今、藍の前での『山崎梓』が出来上がっていくことを感じていた。

梓は自殺などをするタイプではない。それなりに思春期特有の影もある。が、夢に向かって歩いているつもりだった。彼女は、少なくとも今は、『死』を感じたこともなかった。

あくまで梓は『落とされた』。あの歩道橋の上から。

さて、考える。

あの場に居たのは五人の学生。つまり梓にとって四人の容疑者だ。あの時のことを思い浮かべてみよう。

蒼いランドセルの小学生。梓と反対側から歩いてくるのが見えた。

体格的にも梓を押し上げることなんて不可能。彼女は除外。不良の高校生。彼も前から歩いてきた。

彼も除外。

あと二人。

梓とすれ違った男子中学生と、そして梓の後ろを歩いていた坂城藍。

私はそれなりに夢を見るのが好きだった。

藍にはまだまだ言っていないことはたくさんあった。ひとつ。自分が『落とされた』こと。

指を一つ立てる。ふたつ。犯人探し。みつ

落ちる直前に見えたもの。

黄色い後ろ頭が眼に入る。振り向いたらまず、あの真つ青の眼が眼に入るのだらう。（あの色は忘れない）

今度は梓が彼の後ろに居るがさて（・・・・・・どうしようかなア）

梓は自分のことに無関心なのではない。そんなことは彼女の性格上ありえない。

梓は、生きることを一度も諦めたことなど無かった。

## ：人魚姫

この苛立ちを、どう処理したものか。

彼女の中で、二つ三つと姿が現れ消えていく。

カーテンの隙間から三日月が見えた。昼間は明るい水色のカーテンも、宵の中では深い藍色を被せて揺れていた。今夜は風が少し強い。

苛立つことばかりだ。腹立たしい、腹立たしい  
自分を邪魔するもの、道をふさぐもの、惑わすもの。

なんで、どうして、どうして、どうして。

叶わない恋だったことは、わかってる。でも今の私の動力源は、まさしくそれなのだ。邪魔するものを排除しない限り、動けやしない。

あの丸い、真珠の様な両眼を思い出す。美しい人だった。海の底の大粒の真珠である。手のひらにツンと立つそれは、確かに大切に守りたくなるような姿だ。

わかってる。分かってる。

決して、わたしは同じ土俵上に居るわけではない。劣っているのは自分の方だ。

競うとすれば、彼のように、または彼女のように、特別な眼でも無いと駄目なのだろう。特別な力でも無いと駄目なのだろう。あの兄妹のように、秀でた何かが無いと。私は舞台の下から、野次を飛ばすことしか出来ない。

最近、一人クラスメイトが事故に遭った。

恐ろしいことに、その日、恐らく私が彼女に最後にコンタクトを取ったのだ。

といったって、睨みつけたただけけど。

視線は合った。そのあと彼女は、なんでもないように先に眼をそらし、・・・・その帰り道、歩道橋から落ちた。

（そんな、まさか）

その翌日に、先生から彼女に悩みはあったかと聞かれた。教師は自殺を疑っているらしい。

そう話す方ではない。実を言うとおの日、初めて視線を合わせて会話した。しかしあの時の自分の意見を主張する彼女の眼は、あまりにも強かったのだ。自殺なんてするだろうか？

（まさか）

もしかしたら、なんて考えてしまう自分は末期なのかもしれない。冬は近いが、まだ温かい秋の夜だった。窓を開け放してもいいくらいには。

だというのに。

【魔法使いのはなし】

魔法使いは言いました。

おんなじになりたいのです。

違うから省かれるのです。ならばおんなじになりましょう。そう言って魔法使いはみんなにお化粧をほどこしました。



まるで、魔法のようだと思んは喜びます。

踊るみんなに魔法使いは手をたたき、祝福します。

さて、そして輪になるみんなの中、うまく踊れなくてしょんぼりする一人を指しました。

「次はあなたが魔法使い」と。

### 【trope】

言葉の比喩的用法。言葉のあや。

### 【pageant】

パジェントとは「ページを開く」という意味の言葉から来ており、歴史的な出来事の場面を本のページをめくるように次々と表現し、自由に創造するという意である。

・（歴史的な場面を舞台で見せる）野外劇、パジェント。特にクリスマス聖誕劇のこと。

・（時代衣装などをつけた壮麗な）行列、山車、華やかな見もの

・（壮麗な行列を思わせる）目を見張るような連続

・ 壮観、壮麗、盛儀

・ ラテン語「舞台」

・ （意味のない）虚飾、見せびらかし

## 匂い立つもの

山崎梓は覚えている。

じわじわと暗くなる視界。それは夜が近づいていたためか、それとも他の何かだったのか。

夜の匂いが近づいてくる。昼間、慣れ親しんだあの空気はきつと、陽の匂いが漂っていたのだ。

陽の匂いが消えると、こんなふうになるのか。そう思った。音はひたすらにうるさかった。

何も考えることは出来ず、ただ、この匂いは嫌いではないと思った。

ただの子供だった梓にとって、『夜』はとても魅力的な時間だったのだ。

梓が運び込まれたと思われる病院は一つしかない。だから藍はまっすぐにそこに向かった。

大学の付属病院と看板を掲げたそこは、敷地も大きく入院患者がメインだが、近所に救急医療病院もある。

病院は信用第一。この界隈で『病院』といえばまずそこだ。しかし入ってすぐ、藍は思わず立ち止った。

「・・・どうしよう」

『なあにが？』

梓は呑気に欠伸をしながら、藍の顔を覗きこむ。

「この場合って・・・どう言ったら」

『・・・あー・・・』

入院患者ならば『 さんの病室はどこですか』となるだろう。  
しかしこちらは『死人』。

まさか『 さんの遺体はどこですか』と、言うわけにもいかな  
い。

「あとこれ、どこに聞けば・・・」

『あー・・・』

大きな病院と言うものは、総じてゴチャゴチャしているものだ。  
受付らしきものは、今居る正面ホールからパツと見ても三つ。

それは、紹介患者窓口と、保険証提示の受付と、支払いの受付な  
のだが、病院にあまり縁のない、健康良男児の藍にはその差がよく  
わからなかった。

さらに良く見れば、図書館にあるような、病院配布のカードを提  
示して予約等を確認できるコンピューターなんかも入り口脇に並ん  
でいる。

この短い人生に何度かは来ているはずなのに。未知の空間に藍は  
うろたえた。こんな時に限って、病院職員は歩いていない。

『・・・その辺の人に訊いたら？』

「そつ、でもつ、病院に来てる人って言うと、どの人も具合が悪い  
んじゃない」

『そう？意外に元気そうな人もいるよ？ほらあのお爺さんとか、お  
年寄りはいけそう。あと付き添いで来てる人とかさあ』

「・・・わかりました。ちょっと訊いてきます」

藍は緊張の面持ちで歩いていく。

『がんばれ藍ちゃんフレッツフレッツあ・い・ちゃ・ん』梓は手を振って見送った。

やはり、ああいう反応になるのも、自分の外見を自覚しているからなのだろう。

突然現れた外国人にしか見えない少年に、声をかけた優しいがな婦人は遠目から見ても驚いていたが、しばらくすると難なく藍は、丁寧にお辞儀をしてから帰ってきた。

藍は人見知りだと思っていたが、さすが寺の息子。老人相手だと幾分気が楽だったのかもしれない。

『どうだった？』

「どこに訊けばいいかはわかりました」

## 文字から色を見る少年

「山崎さんは待って下さい」その言葉に頷いて、梓は順番待ちの椅子の端に座った。平日の夕方だからか、勤め帰りの姿が目につく。邪魔だからと追い払われた感が否めない。

兄妹だろうか。ふと、後ろの席に座る小学生の甲高い声の会話が耳に入った。

どうしてそんな会話になったのか、首をかしげるような内容だった。

「『さしすせそ』は秋の文字だろ。だから秋の色なんだ」

「・・・ふーん。じゃあ、『あいうえお』は？」

「水色とか朝の色！」

「朝は水色なの？」

「つたりまえだろ。空気が水色じゃん。夜は紺色！で、夕方とか朝は青！」

「へー、じゃあ『かきくけこ』は？」

「かきくけこも秋の色。あつても、さしすせそは枯れた木の色で、かきくけこはこーよーの色」

「赤とか、きいろ？」

「んー・・・あと、くだものの色！」

「たちつてとは？」

「みどり。夏のはじめの、んー・・・しち月くらい」

「木の色？」

「葉っぱの色。夏のはじめのこと、初夏ってゆうんだって。だから初夏の文字」

「なにぬねの」

「むらさきとオレンジ」

「ふたつ色あるの？」

「なにぬねのも秋！」

「どう違うの？」

「なにぬねのは今くらい。じゅーいち月。『もうすぐ冬ですよ！』

って感じ『なむねの』はむらさきだけど、『に』だけオレンジ。五  
個全部おんなじ色じゃねーもん」

「違うの？」

「あいうえおも、『え』だけきいろ。他もおんなじ水色じゃなく  
て、ちよつとだけ濃さが違う。

えつと、学校の帽子とかじゃなくてチヨークの黄色みたいな薄い  
きいろ」

「違うの？」

「水色はあ、えーとつ、チームカラーなんだ」

「ねーねー春の文字は？」

「『はひふへほ』と『あいうえお』と……あと『やゆよ』！」

「『わをん』は？」

「それはお正月」

「『まみむめもは？』

「二月。冬」

「『らりるれろ』」

「夏！」

「なんで？」

「『らりる』に『れろ』ってすると暑そうだから」

「……意味分かんない」

「なんでだよーこう、ふいんきが」

「……ふんいきだよー」

「なんでだよふいんきっていうじゃーん」

男の子の方がむくれた声を出した。女の子の方も納得がいかないように唸っていたが、そのうち「せいこーくんがそれでいいならいいんじゃないの」と言った。

小学校低学年くらいだろうに。男の子はいつでもちよつと馬鹿だ。

「あつ！そーだあっちゃん、この前さあ、おれのワニノコがアリゲイツに進化したんだ！」

とたんに機嫌を取り戻した兄に、妹が小さく溜息を吐くのが聞こえた。

「・・・小学生怖え」梓は思わず、聞こえない声で呟いた。

あの兄妹の、主に妹の方の数年後が不安になる。

いや、案外自分もあんなもんだったかもしれない。梓は苦笑して、もう一度兄妹の微笑ましい会話に耳を傾けた。

「は？」

窓口の事務員が、思わず、といったふうに分らした。

「あの・・・ですから、三日前に交通事故に遭った、あの、山崎梓さんの、」

質問をそのまま言ったのが悪かったのだ。事務員は眉を下げ、困惑したように藍を見返した。

（・・・言葉がよくわかっていないと思われてる）

胃のあたりから湧いてくるような嫌な汗と、あの感情が吹き出し

てくる。藍は慌てて蓋を閉めた。  
「ですから、」その時だった。

「ねえ今アンタ、『交通事故に遭ったヤマザキアズサ』って言った  
よね」

肩に置かれた手。一拍置いて、藍は振り返って相手を見た。



## 文字から色を見る少年（後書き）

せいこうくん（7歳）

周 晴光くん。ポケモン好き。背の順で一番後ろなのが自慢。

あっちゃん（6歳）

三浦 朝子ちゃん。マリオやぶよぶよの方が好き。正直こいつと趣味は合わないと思うているが、自分の方がお姉さんだし（精神的に）、長い付き合い（幼稚園から）なので遊んでやっていると主張する。

## 感覚で生きる少女達

「ヤマザキアズサって、山崎さんのことだね？」

そこには藍よりも頭半分ほど背の高い少女が三人、藍を囲むように立っていた。「Y女子の山崎梓さんだね？」

少女は綺麗に数センチずつ大中小と背の高さが揃っていた。

藍がそつと小さく頷くと、真ん中の一番背の低い少女が言う。

「アタシら、山崎さんのクラスメイト」

「はぁ……」

垂れ目で柔らかい外見に反して、はつきりとした口調で彼女は藍を見下ろす。「ほらぁ、やっぱりね。山崎ってさぁ」後ろの『大』の少女が隣の『中』に言った。

「山崎さんのことでちょっと話したいの。いい？」

口を開き、早口で終わると同時にピツと唇を真横に引く。藍にはそれが必要以上に威圧的に見え、また頷いた。

見れば、窓口の事務員が、露骨に迷惑そうにしかめっ面をしている。藍は慌てて、窓口脇の椅子に移動した。

梓の座っている場所も見えるが、あの呑気な幽霊はうつらうつらと舟を漕いでいる。

「ねえー、いいんちよとどういう関係？親戚の子？……まだ中学

生だよねえ。学ランだし」

「……友人で」

「ちよつとなつちゃん、怖がってるよこの子。アンタが怖いから」

「ひつど！コワくないし！……あ、いいんちよつて、山崎さんのことね」

「本当は委員長じゃないんだけどさ。あの人って、小中と五年連続図書委員なんてしてた伝説があるから」

「あつ！その制服式中じゃね。アタシも式中出身」

「……ちよつとアンタうるさいわ」

「うるさくないし！」

「いや本当うるさいよ」

「なつちゃん、ちよつと黙ろうか」

「ひつどいわあもう！西藤ちゃんまでっ！」

中が大を引つ張つていくのを見て、『小』はわざとらしく息を吐いた。

「ごめんね。あの子頭ユルくてさ」

「あつ……いえ」

「アタシ、酒氏ミヅキね」

「坂城です。式中の二年です」

「あら一年かと思つたわ。ごめんね」

ミヅキはニヤツと笑つた。「……いえ、よく言われます」藍はそう言つしかない。

「ウチつてさ、ほら女子高だから、男子に飢えてんのよね。あの子なんか、彼氏と別れたばつかだから、『次は年下よ！女光源氏になつてやる』なんつって」

こついったことに疎い藍には、気が遠くなる話だ。高校生と言うのはこんなものなのだろうか、と思つた。

「君さ、弄くりまわしたくなるって言われない？」

「言われません」

「即答？・・・怪しいなあ」

ニヤニヤ笑いを張り付けたまま、ミヅキは頭を掻いた。

「んでね、話ってさ。やっぱ山崎さんのことなんだけど」

「・・・」

ミヅキの顔から笑みが消える。こちらを見る黒い目の色の濃さが、心なしか増したような気さえた。

「山崎さん、何で落ちたの？」

藍は首を傾げた。（それをなんで自分に訊くんだろう）

「周りは自殺やらなんやら言ってるけどさ。ありえないんだよね、あの人に限って」

「・・・」

「あの人世渡り上手だもん。　　ちよつと恥ずかしい話なんだけ

どさ、アタシらグループって、ちよつと居場所無いのよね。

アタシ短気は損気を体で表したこんなん空気読んで話すっての  
苦手だし、なつちゃんアタシよりKYな上に、いつもテンション  
高いし、西藤ちゃんは何考えてんのか分かんない子だし、ハズレて  
んのよ」

そう言う彼女は、口を尖らせ、まるで拗ねたような顔だった。

「山崎さんは偏見無い人で　　っていうより、あんま学校に興味  
が無い人でね。

いや、学校っていうより、学校行事と学校の人間に興味が無いの  
かな。目標があって入った人っぽいから　　そんなだから、ア  
タシらグループと他のみんなとの大事な橋渡しの一つだったの。

うん、本人意識してなかったみたいだけど、すっごい助かったのよ、地味にね。『楽しむ時は楽しまなきゃソン！』って考え方だったし。

縁の下の力持ちって、ああいうのなのね。いや、能あるナントカは爪を隠すってやつなのか、完璧主義なのか・・・仕事を与えられると、きっちりしてくれるの。普段は地味なのよ？ 本当に。

あの日もさ・・・大活躍だったの。あ、アタシからしてみれば、だけど。

ちょっとクラスの派手なグループとモメてね。どっちが悪いかっていうと、確実にアッチだし でも多勢に無勢って状態で、腹が立って腹が立って、どうしようもなくなくなっちゃって。

普段大人しい西藤ちゃんまでさ。ぶっちゃけ今も腹が立っただけど。そこを、 ま、山崎さん一人じゃなかったけど、フアインプレーは間違いなくあの人ね。うまいこと納めてくれたのよ。『そういうことは心に収めておくもんでしょ』って。

正論って大事だね。そりゃ『正しい論』だもんね、まあよく口が巧いわ。うっかり百合に走るかと思ったもん」

冗談混じりの口調とは裏腹に、彼女の面持ちはどんどん陰しくなってくる。

「山崎さん、帰宅部だから、そのあとすぐ帰ったの。本当だったらもっと早くいつもは出てるんだけど、そのせいでちょっと遅かったのよ。だいたい三、四十分くらい。」

わかるでしょ？あの人自殺とかする人じゃないの。目標があって、いつも学校には『行かせてもらってる』って言ってた。

ウチ金持ちも多いから、家のために親のために、学校『行ってやってる』とか言う奴、結構いんのよ。馬鹿よね。

いつもと違ったから落ちたのか。それなら責任はアタシ達にあるわ。

・・・ねえ、その時のこと、教えてよ。アンタあそこに居たんでしょう？・・・馬鹿な喧嘩、買わなきゃよかった。アホ共には言

わせときゃよかったのに。山崎さん目立つの、嫌いなのに頑張ってくれて。目が覚めなかったら、恩返せないじゃない……」

ミヅキは涙目でこらえる様に下唇を噛んで俯く。視線を感じ、売店を見ると、離れたそこから見守るように二人がこちらを窺がっているのが見えた。

そういうことか。彼女らは何処からか、自分があそこにあの時居た目撃者ということを知ったらしい。

しかし妙な気分だった。藍にとって梓とは、まだ出会って三日の変人幽霊だ。彼女の言うような地味な優等生ではない。出会ってまだ三日。藍はまったく梓の人格をつかみ切れていなかった。

子供っぽくてハイテンションで、ジョークが好きで、雑学をひけらかす変人。それだけだ。

この時点で親兄弟の事を何も言わない彼女を、親不孝とすら思っていた。

『親に行かせてもらってる』

『親のために行ってやってる』

はたしてどちらが普通なのだろう。確かに学費を払うのは保護者だが、今高校とえば必ず行くものだろうに。だって高卒大卒でも就職出来ない時代なのだから。

藍は複雑な心境で、おずおずと口を開いた。

「実は僕、あまり見てないんです」

「……見てない？」

「僕は山崎さんの後ろを歩いていました。けど、クラクションの音

とかでやつと、気が付いたくらいで……」

「……でもあの歩道橋、めっちゃ幅狭いじゃない。せいぜい二メートルちょつとでしょ？後ろつて、どんくらい離れてたのよ」

「五、六メートルか……。それくらいですね。通学路なので……。下校途中はあまり人を見ないんです。山崎さんが落ちた方向はネオンがきつくて、眼がチカチカするんで、いつも反対側を見て歩いてたんですよ」

「変なの。進行方向見ればイイじゃない。……。でもまあ、そういう人もいるか。うん」

納得した。ありがとう。時間とつてごめんね。そんなわけはないだろうに、そう言うミヅキは調子を取り戻したようだった。今度は柔らかに笑みを乗せ、人当たりのいい雰囲気を出している。

「ほらいつまで漫画読んでんの！なつちゃん行くよ！」

「……。え、ええゝ理不尽だあ。読んでんのは西藤ちゃんだもん」  
「西藤ちゃんも！」

「……。ちよい待って」

「ありがとね！坂城くん。あ、そつだ、山崎さんの病室なら、一緒に行つてあげんよ。どう？」

「……。え？」

藍はぱちりと目を瞬いた。

数秒かけて、言葉の意味を噛み砕く。

「え？」

梓は今や、誰も居ない椅子数席を陣取ってすうすう寝息を立てていた。枕元に置いた眼鏡を踏みそいで、危なっかしい。そもそも眼鏡をはずす必要性があるのかはわからない。

「まだ眼は冷めないけど、さっきアタシらも見舞ってきたし大丈夫でしょ！ほら行くよ」

ミツキの声が急かした。

「……ええ!？」

藍は思わず頭を抱える。

(……生きてるじゃん山崎さん!)



## 感覚で生きる少女達（後書き）

なっちゃん

大。未っ子気質のムード メーカーだが、意外に繊細。茶髪のパーマ。

西藤ちゃん

中。端正な顔立ちの中世的な美少女。黒髪ショートカット。マイペース不思議系。実は一番図太い。

酒氏 ミツキ（みづきん）

小。茶髪ボブ。たれ目の童顔、ロリで隠れ巨乳。子リスの様な少女だが、我が強く短気で姉御肌。面倒見がいい肝っ玉お母さん。

## 魔法使いを呪う少年

「……ちよつと、ねえ」

梓は声と共に肩を揺さぶられて目を覚ました。寝惚けたままの頭のまま、かろうじて目の前の人影を視界に入れて起き上がる。

「起きた？」人影は、梓の顔を覗き込んで首を傾けた。傍から見ると、キスをしているように見えるかもしれない。

『……おはようございます』

「……君のお友達、行っちゃったよ」

ぼやける視界に、梓は傍らの眼鏡を手にとった。

「いいの？君のこと、ばれちゃったみたいけど」

梓の横に腰を下ろした少年は、呆れを滲ませ体の前で腕を組む。

梓は寝癖の付いた頭を掻き掻き、少年を見やった。

『何、見てたの。君、靈感少年？』

瓜実顔に色白の、中性的な雰囲気少年だった。一見は黒い髪に黒い瞳の典型的な日本人に見えるが、どこか浮世離れた異国風の雰囲気もある。生来のはずの黒があまり似合っていない。

「……まあね。はじめまして、小嶋凜っていいいます」

『絶賛幽体離脱中、山崎梓十六歳です』

自己紹介した少年に梓はこんな感想を持つ。

(・・・あら美人さんだわこの子)

右手を差し出すと、淡々と真つ黒の瞳でこちらを見てくる少年は、小さく笑って梓と右手を交わした。

「まーばれたらばれたで、別にいいんだよね。ボク、いつちども藍ちゃんに自分が死んだなんて言っていないもん。」

あの時、撥ねたのも轢いたのも、軽自動車だったしさ。足は骨折したし、打撲もしたし、頭も打ったけど、そう大したもんじゃあないの。内臓は無事だったし、背中も打たなかったから後遺症も無いし、信号があつたからスピードも出てなかったし、何より処置が早かった。現場からこの病院すぐだし。不幸中の幸いってやつ?」

「自覚してるんだ」

梓はあくまで楽観的に笑い飛ばす。凜は僅かに驚いた。

(・・・恐怖は無いのか?)

あの高さから走る車の群れに落ちて、さらに体から離れて。あの場を最初から最後まで、しっかりとこの目で見ていた凜は、まじまじと彼女を観察するように見つめた。

「あとは体が覚めるのを待つばかりよ。あと二、三日はかかるでしょ。もうこうなったら、霊体って言うのを活用しようと思ってサ」

「何かやりたいことでも?」

「まあ別に、体あつても出来ることだよ。やろうと思えば。・・・でもさあ、ほら、君みたいな人じゃないと認知されないって、そうないじゃん?」

「幽体離脱って、そんなもんなの?」

「ボクはそうだった。・・・見えたのは君と、あの坂城って子だけ」

恐らく　　梓には、体が『起きる』その時は分かるだろう。大

丈夫だという、根拠のない自信があった。

体は安全だ。またもう一度、あの足で立って歩く時が来る。そしてそれはそう遠いものではない。それまでに……『犯人探し』をしよう。梓は眼がさめるまでのプランを頭に描く。

藍は今、梓にとつて最大の容疑者だ。彼が素直で真面目な人間とすることは知っている。しかし、動機など、被害者である自分には推し量れないのだ。

「……わっるい顔。今キミ、すっごい悪人ヅラしてるよ」  
『あらやだ』

右手で口元を押さえておどける。現実離れた雰囲気を持つ少年に、梓は少し興奮していた。

『……なんでボクに話しかけたの？』

「教えてあげた方がいいかなってお節介と興味。俺、君見てちょっとびっくりしちゃった」

『え？』

凜は人差し指を口の横に立てて目を細めて笑った。

「……山崎さんがちゃんと人間に見えたから」

『……どういう意味？』

「そのまんまの意味。俺、妹以外は人間に見えない人なの」

『……』

梓は一瞬、動きが止まった。『……特殊な趣味の人？』

その反応に凜はまた笑う。

「性的対象じゃなくて。シスコンは認めざるを得ないけど」

『へー……そっかあ』

「うん」

『仲いいの？』

「……うーん。微妙。でも喧嘩はしたことないな、似たもの同士だから」

ふと、凜は藍達が消えていった通路を見る。

「うちの妹、可愛いよ」

『まあ、君の妹なら可愛いだろうなって予想が付くよ』

「……ふふ」

満足そうに凜は立ち上がり、梓の前に立った。驚いたように梓は凜を見上げる。

「ねえ、俺も今、ちょっとしたこと計画中なんだ」

『……』

何故だか口をはさむのを憚られて、梓は黙ったまま凜を見つめ返す。凜は無表情だった。

「久しぶりに人間が見れて嬉しかった。だからキミに話しかけたんだ。俺、本当に妹以外は人に見えないんだよ。何故だろう？今の君は幽霊だからかな」

淡々とした口調で凜は続ける。

「これは呪いだから、もうすっかり慣れてたはずだったんだけど。ちよっと嬉しかったんだ。俺も自分で自分にビックリだよ。さて、山崎梓さん、」

『……』

「犯行予告します。俺、小嶋凜は明日、化け物を一人倒します。その後、俺達兄妹に呪いをかけた魔法使いを殺しに行きます」

梓は今度こそ金縛りを受けたように硬直した。

「さて　俺は化け物を倒したら貴方にわかる方法で伝えましよう。化け物を倒すのは最優先事項なので、魔法使いは絶対にその後になります。もし、貴方が魔法使いなら、貴方はどうなるかわかりますか？」

凜は梓に人差し指を突き付けた。

「次に会うときは、君が魔法使いだった場合と、君の体が目が覚めた時に、俺が会いに行く場合。約束しよう。君の体が目覚めたら、俺は必ず君に会いに行く。違った場合の時は謝罪させてほしい」  
それだけ言うと、凜は一步後ろに下がり、眺める様に梓を見てから、呆然とした彼女を置いたまま出口に歩き出した。外はすでに暗い。

「じゃーね」

最後の一瞥。その一瞬で見た瞳の色に、梓は跳ね上がるように椅子を蹴った。

病院の明るい照明がはつきりと照らしだした。あの浅黄色薄い青の瞳。

梓は凜の腕をつかもうと手を伸ばす。

「　あ」

「　っ　な　」

するりと梓の手は空を掻いた。凜はすり抜けた自分の腕を、梓を見ると、顔をしかめてまた歩き出した。

「　っ　待　っ　て　！　待　ち　な　さい　よ　！　」

「　ち　よ　っ　と　待　っ　て　！　」

「　ア　ン　タ　で　し　ょ　！　私　を　あ　そ　こ　か　ら　落　と　し　た　の　！　」

「　ね　え　！　ア　ン　タ　の　そ　の　眼　、　覚　え　て　ん　だ　か　ら　！　」

「　ね　え　ち　よ　っ　と　！　」

『待てって言うて  
凜はもう一度も振り返らなかった。』

追いかけることも考えたが、頭をよぎった考えに梓は足を止めざるを得なかった。

（もし追いかけたとして、この体で何が出来る？）

彼は何だ。自分がその『魔法使い』とやらだと思ったから落としたのか？だとしたらとんだ人違いだ。迷惑も甚だしい。

どういうことだ。何故自分はその『魔法使い』とやらと間違えられた。何故彼はそう思ったんだ。

自分は何かしたのか？『呪い』って、なんだ。

（……呪い？）

まさに、自分のこの状態もある意味では、呪いのようなわけではないか？自然の中ならまだしも、人工的な灯りの多い街中では星など見えず、いつもどんよりと霞がかかった紺色の空が広がっている。その様子は感動などには程遠く、ただ不安になるだけだった。

誰にも見えない。聞こえない。触れられない。

戦慄する。

そこで初めて、猫被りの少女は本気でこの状況を自覚し、恐怖した。

（……………どうしよう。私、独りぼっちだ）





魔法使いを呪う少年（後書き）

小嶋 凜

人魚。シスコン。

## ビデオテープを巻き戻せ

藍は横目で梓を見た。

梓は相変わらずだ。先ほどから、藍のベッドの上で背を向けて寝息を立てている。

（よくもまあ、他人の部屋で・・・）

呆れつつ、ふと、幽霊に睡眠は必要なのだろうかと思った。いや、ただの幽体離脱とわかったから生き霊か。

睡眠は脳内でその日にあったことを整理するため、必要だという。夢を見るのは、その日に会ったことを再生していくためだと。

梓は意識も蓄積する記憶もあるのだから、当然、睡眠も必要なのだろうか。いやでも、肝心の脳の詰まった体は数キロ先の病院だ。

「・・・・・・・・」

今、時刻は夜の十一時。当たり前だが、外は真っ暗、夜だ。窓には数多の雫が貼り付いては落ちていき、何も見えやしない。

あの後、病院から帰ったすぐ後に雨が降り出したのだ。しとしとどころではなく、風も相まってザアザアと屋根まで突破し窓に討ってくる。

（・・・・そろそろ寝ようかな）

明日の朝は早いだろう。この雨では登校前にもたつくかもしれない

い。

どうやら、梓の体はこちらが視覚的に認識してやり、触ろうとしなければ触れられないものらしい。意識の落ちた梓の肩を軽く揺らしてみたが、彼女はまるで死体のように　この表現は悪いか。

まるで泥のように眠っていて、ピクリともしなかった。

仕方ないので、梓と背を合わせる様にして横になった。電気を消す。

（明日、山崎さんと話してみよう。うん）

少しの譲歩。こういったことは苦手だけれど、誰でもやっていることだ。自分にも出来ないわけがない。

彼女はきっと、訊かなければ言わないのだ。

## ノイズだらけのカセットテープ

チカチカとする視界に、凜は光る瞳を抑えるように手を当てた。

空が赤い。夕日では無い、朝日だ。この暁の中なら、恐らく自分の目も目立たないだろうと、右手を脇に下ろした。

高台からは、あの男がゆっくりとこちらに上ってくるのが見える。青島草平。

三十八歳の国語教師。かつての自分の担任だった男である。そして、凜が学校から追い出した男だった。いや、実際手を下したのは学校側だ。凜はその原因にすぎなかった。

セイレーンという力が、凜にはある。

自覚したのは十四歳、中学二年の時。二年前だ。それは基本的に『人に愛される』能力だった。凜が自覚する少し前、中二の夏まで青島は担任だった。

見方を変えれば　そう。うっかり凜の能力に飲まれた犠牲者である。

凜は最初で最後、彼を犠牲にしてこの能力を自覚し、制御できるようになった。

凜にとってそれは哀れだと思いつつも、大した問題では無い。この数年でわかったことだ。

セイレーンは、漏れ出した程度では誘えない。

つまり、この男は少なくとも心の奥で、そういったことを考える

人間側だったということだ。セイレーンはきつかけに過ぎない。この男は、自分の意思でそういったことをする、または考えていた男だった。

ゆっくりと瞬きをする。それだけで凜は自由に瞳の色を変えられるようになっていた。

「お久しぶりですね、青島先生」

「・・・ああ」

二年前より老けている。

顔全体がたるんでいた。余った皮が深い皺を刻んでいる。疲れたような顔はしかし妙に脂ぎっていて、呪いの分を差し引いても、凜には十二分に不快に見えた。

顔色は変わらないが、そわそわと落ち着かない様子で、青島はその場を見渡す。この男は二年の間に、すっかり小心者になったらしい。二年前はその場の勢いがあつたとしても、随分と大胆だった。むしろ大胆すぎた。失敗から少しは学んだのだろう。

青島は背は低い、その分横に大きい筋肉質な体格をしている。柔道の有段者、との噂だった。

（・・・まあ確かに人を押さえつけるのは上手かったよな）

噂は真実だ。凜は身を持って知っている。別に寝技だけが得意なわけではないだろうが。

どうも、こないつ人が来るかも分からない場所ではなく早く屋内に入りたいような様子だが、それでは意味がない。

・・・さて、問題なのは。こいつがそういう趣味の人間だとして、守備範囲はどれほどのものか、ということだ。凜は同世代にしては細い方だとはいえ、この男同様、この二年間の成長期の間で様子も変わっている。

だが。（・・・まあ関係無いか。）

こちらはもう二年前とは違う。その程度、問題では無い。  
凜が大切なのは妹だ。

両親は共に健在だが、凜にとっての家族は妹だけだった。

（それが                      今度は妹だって？）

人魚は魔法使いに呪いをかけられました。

まわりはずらりと並ぶ何かです。人は人に見えません。  
ただの何かに見えました。

魔法使いはこれを魔法だと言いました。

人魚は幸せになるために魔法使いに頼んだのです。

どうかどうか、あの地を踏む足がほしい。あの人と

踊る足がほしい。

こんなことなら足なんて要らなかった。

こんなことになるのなら。こんなに苦しむのなら、ただ変わらず、  
全部忘れて、離れて静かに暮らして居たらよかったのに。

何故あの子は、妹は足なんて望んだのか。

尾ひれでいいではないか。

踊れなくとも、波を感じながら泳げれば。

それでいいじゃないか。

くやしくやしい。

何故彼女は自分などに会うために、そんなもの望んだんだ。

彼女は足の代わりに尾ひれを、水中で息をするためのエラを亡くしたのだ。

たった一人の兄妹だ。それなのに。

そのために呪いなんて二人揃って掛けられて。

二年経って、ようやくとかなるようになったんだ。

それが。そんな時に。

お前があいつの王子様？

あいにく、俺の眼にはお前は人じゃない。化け物に見えるさ。

お前が妹に愛される？馬鹿を言うな。妹も同じ目を持ってるんだ。

せいぜい偽物に騙されればいい。

今の俺は妹の贋作だ。そんなものでも満足できるんだろ。

セイレーンに引つかかったのが青島だったのも、青島が妹の学校に赴任してきたのも、たまたま妹がその生徒だったのも、青島に眼を付けられたのも、全部が全部偶然だ。

いや、もしかしたらこれも魔法使いの呪いなのかもしれない。しかしそれでもいい。

凜が妹を守るためにこうすることは、どちらでも変わらない。

全部が終わったら、魔法使いに感謝してやるよ。

この魔法が、力があつて良かったと始めて思った。

人相手ではなく、化け物相手なら。そしてセイレーンの力があつたから。

皮肉にも、こうして妹を守る術があることが嬉しかった。

餌をまく。

（青島が俺を掻き抱いた。息が荒い。相変わらず、タガが外れると妙に大胆だ。先程までは落ち葉の音にも、肩を揺らしていたくせに。）

近づいてきた魚の首を、思いっきり取った。

（襟首をつかむ。肉厚の腹に膝が沈んだ。）

押す。

（落ち葉に滑り、青島は足を折った。バランスを崩す）

その先には、つらづらと続く、階段が

・  
・  
・  
・  
・



（西の空に残った星が、  
綺羅綺羅と輝いていて  
）

## 懐かしの復興版ブルーレイ

『朝は空気が水色だから』なるほど、言われてみればそうかもしれない。子供の発想というのは、凄いものである。それとも、あの少年が特別、感受性というものが豊かなのだろうか。

『藍ちゃん朝早いねえ、いつもこんななの？』

「・・・今日は特別ですよ。起こされたんです、山崎さんは寝てましたけど。あと藍ちゃんはやめてください」

『じゃあ呼び捨てにする。いい？』

「お好きにどうぞ・・・」

右手にチリトリ、左手に竹箒を引き摺って藍は境内を歩いていた。夜のうちに雨は降り切ったのか、地面に水たまりを残し空は晴れ渡っている。しかし雨は、水たまり以外にも多大な被害を残していた。

「くそ・・・もう少し降ってくれてればよかったのに」

境内　　つまり藍の実家、坂城家の家長が住職を務める寺院内だ。早朝から藍が駆け出されたのは、昨夜の雨で落ち葉が一気に落ち、境内を雨にもまれた落ち葉でいっぱいにしてしまったためだった。

とりあえず、寺の玄関と言える境内の正面から石段までを一掃してくれればいいとの母のお達しだ。寺営業はまず、境内の清潔感からだというのは坂城家の家訓である。

かくして藍は、登校前の早朝から庭掃除に繰り出したのだったが。  
『これは酷い』

状況は予想以上。高台にあるこの寺は、街のはずれなのでぐるりと木に囲まれている。すこし降りれば、ちよつとした林だ。

椿などの常緑樹もあるが、基本的に正面は花と紅葉が綺麗な落葉樹が植えられている。父いわく。『その時の姿の移り変わりを楽しむのが日本のいいところ』。(栗毛で瞳がヘーゼルの袈裟姿の男が言つと、とってもシユールだと息子は思ふ)

・・・まあつまり。

ここはとくに落ち葉が多い場所なのである。

さらに雨の水分を纏った落ち葉は、糊にまみれた紙屑の様な始末で、べつとりと地面に貼り付いている。なぜ朝からこんなに憂鬱にならねばならない。まだ朝食も食べていないのだ。しかも今日は特に寒い。

『アイ、寒くないの?』

『山崎さんを見てるだけで寒いです』

『えっ?何?原因ボクかい?理不尽だねえキミ。女子高生の生足なめんなよ。ハートが熱いから皮膚が麻痺するんだ。凄いだろ』

『それも危険じゃないですか・・・』

呆れた風に半眼でねめつける藍に、梓は得意げに続ける。

『男にも言えることだよ。ほら、クラスに一人は居るだろ。一年中半袖短パンで頑張るやつが』

『絶滅危惧種です』

『えっ!ボクの時は大山くんと大沢くんっていうアホ二人が居たよ!?・・・まずいな。数年の間に時代は動いてる・・・。まさ

かそんな小中学生にまで草食男児化が進むなんて……!」

「ああ、小学生だから、草食男『児』……」

『そうそう……っていうか、今日はなんでかよく話してくれるね。いつも無視してるのに』

大袈裟に驚いてみせる梓に背を向け、箒を手に取り藍は言った。

「別に……今誰も居ないから」

『はあ、なるほど。誰も居ないところに話しかけて、気味悪がられる主人公はセオリーだよ。実によくあることだ』

藍は今まで頭の中だけだった言葉を口に出しただけである。

まだ梓を成仏させようとしていた二日までは会話もあったが、三日目には早々藍は諦めてしまったのだ。

二日間。その時は知らない女の子と共に居ると言う緊張と、遠慮言えなかったことも上乗せして口に出した。

なんと言ってもまだ四日目。藍にしてみれば、これは精一杯の譲歩である。【被害者】と【目撃者】ではなく、友人という関係に繰り上げしなければいけないという思いを、藍は感じていた。

『……耳赤くない?』

「別に寒いからですよ」

『アイは即答する癖あるよね』

そんなことはない。とは言いつれもない。何せ昨日、酒氏ミヅキに同じようなことを言われたばかりだ

『妖しいなあ』とのニヤニヤ笑いを思い出し、むっとする。いやなもの思い出してしまった。



## あの日あの時あの瞬間

藍はお返しの様に、梓を仰ぎ見た。

「山崎さんは、自分が生きてるって自覚はあったんですか？」

『・・・・・・ボク、一度も自分が死人だなんて言っていないよ？』

予想はしていた答えである。

実に彼女らしい、茶目つけ溢れる返答ではないか。

悪戯っ子の様に歯を見せて、梓は笑った。

『あら、大きな溜息』藍は急激に二十年ほど老けような気がする。梓の笑顔は眩しい。眩しすぎて、目眩がした。

この目眩は、決して彼女に見惚れて発生した症状では無い。強いて言うなら、交際半年の恋人のベットシーンを目撃してしまったような、どちらかといえばそういった裏切りにとそれによって途方に暮れた方の『目眩』である。

やけくそで箸を猛然と振る。力いっぱい地面を擦り上げた小枝が、落ち葉を剥がしていく。

（ああ腹が立つ！）

チクシヨウ！なんて、普段使わない言葉さえ口から出そうだ。やっぱり馬鹿にされているのかもしれない。

彼女はやっぱり変人だ。しれっとした顔で、『だって訊かれなかったもん』。

（訊かなくても言えよ！）成仏させようとした自分がまるで馬鹿ではないか。ざつかざつかと箸を振り回し、落ち葉の山を創っていく。

『あれ？そっちもやるの？階段までしてたら時間なくなるよ』  
「・・・・・・・・」

やるせない、とはこういうことを言うのだろう。藍は真面目であるからして、最初は普通に幽霊の言葉に耳を傾け、普通に彼女のためになろうと頑張り、普通に彼女のため考えた。いくら好かない相手でも、彼女は自分にしか見えないわけだから自分がやるしかない。そう最初は確かに思ったのだ。

馬鹿みたいに一生懸命になったかつての自分にも、何も言わなかった彼女にも腹が立った。彼女は影で笑っていただろう。頭の中で馬鹿にしていたと思う。『アイツまだ勘違いしてるよ馬鹿じゃないの』

友達の成り方は知っている。コミュニケーションだ。藍だって友達作りくらいできるし、やっている。しかし得意な方では無い。

友達にならなきゃいけないと思った。一緒にいるなら【信頼】が必要だと思った。最初に諦めてしまったのはこちらだった。だから

こっちからまた歩み寄らなくては

プライドはズタズタだ。

(・・・弄ばれた)

「ひっ、人聞きの悪い子と言わないでよ！なんかそれじゃあ君を騙くらかして絞り取るだけ絞り取ったあげく、街金融で借金させて、金だけ持って逃げた男みたいじゃないか！」

「人の心を覗かないでください！」

「だあっ！そこは、「最初一文は間違っていないじゃないですかっ！」ってツツコむところでしようよ！」

「そうですよ間違っていないでしょう！今僕はそんな気分なんですよ！」

「うっ・・・」

梓は半歩下がり、うつむいて小さな声で言った。「・・・ごめん」

「出来ごころだったんだ。魔が差したというか・・・アイがあまりにも一生懸命にしてくれてるし・・・まあ、三日目にはもう、放置プレイだったけど・・・」

ぼそぼそと、口をとがらせて梓は謝罪するが・・・

「・・・そうだ・・・そうだよ。ねえあの放置プレイも結構堪えるんだからね！ボクがどれだけ空しかったかわかる？ずーっと独り言！寂しかったんだからあもうっ！」

「(何が「もうっ！」だ)謝る気があるんですかアンタは」

「だからもう、おあいこってことで許して下さい！ねっ仲直り！」



(・・・仲直りも何も)

そもそもそんなに仲良くはないではないか。

藍はどこまでも自分に自信が無かった。家族でも友人でも無い彼女に好かれている自覚など、今の彼には到底無理な話である。

所詮は他人。ちよつとした偶然で、共に行動しているだけの存在だ。

それが。

どうしてそれをしようってんだ。『仲直り』仕様が無いだろう。

自分は彼女が嫌いだし、彼女のことなんて何も分からない。分かるうとしなかった。少し素直になってみようと思ったとたんにこれだ。手は止まっている。

地面までの距離が遠い。

泣きそうだ。

捻くれた天の邪鬼は、零れそうな蒼い目で梓を睨み、唇を噛んで梓に向かって箸を振りおろした。『おひい!』当然、箸は奇声を上げる彼女の体をすり抜ける。

そのまま振り返らず、一気に階段を駆け下りていった。

## あの声あの目あの姿

・・・さて、ここでアイ少年が彼女から姿を消せば、ありがちな青春劇である。

「大っきらい!」「ちよつ、待てよ!」「うわーん」

なるほど、青春ドラマである。が、ここは語り部のボクから言わせてもらおう。現実、そう恰好はつかないのだ。

まず逃げたところで、ここは彼の実家である。しかもぶつかった対象は、家族ではなく他人、彼がいなければ、この場所に何の縁も所縁もない人間。頭のいい彼は、階段に足を掛けた時点でその事実気付、さらに泣きそうになった。

何が悲しくて、実家から逃げなければならない。そういえばまだ朝ご飯食べてない。ああ情けない。阿呆か自分。なんで彼女は自分なんかに取り憑いてるんだ。病院に帰れチクショウ。そうして混乱した彼は、失態を犯した。

重なる濡れた落ち葉。石段は滑りやすい。気づけば、ぐるりと一回転、石段から足を踏み外していた。

ボクはそれを上から見ていたわけだが、それはもうどこの吉本新

喜劇。

派手に、というわけでもなく、実に地味に滑って転んで腰を打った彼は、一瞬自分に起きたことに理解が追い付かず、眼を丸くして固まっている。見事な池やん十八番ギャグである。

『ぶっ』

「なっ……、」

真っ赤になる顔。だから彼は面白い。転がった竹箒を握りしめ、アイ少年は無言で羞恥に震えたのだった。

「………」

『……硝子の少年ブレイクンハート』

「………」

『ぶっ！』

藍は動かない。否、動けない。

（穴があつたら入りたい）なるほど。昔の人は的確なことを言う。

上から見下ろす梓にも腹が立つ。類は友を呼ぶ、というが本当だ。今の彼女はあの時の酒氏ミヅキとおんなじだ。そんなに年下の男を苛めて楽しいか。

『くくく……ほら上あがろうか。朝ご飯食べなきゃ、一日は始まらないよー？ほらほら』

梓が手を伸ばしてくる。緩んだ口元をなるべく見ないように、不本意ながらその手を取った。自分の失態に、逆に笑えてくる。

ずるり、と石段の上の手が滑る。ぬめった落ち葉はとても触れるものではない感触だった。

顔をしかめて、ふと、視界に入った手の平に瞠目する。

「・・・えっ」

『ギャツ！何それ！』

流石の梓も叫んだ。

べつとりと、しかし粉の様にぼろぼろと端から乾いたものが落ちていく。それは明らか

「・・・血？」

「で、こけて手をついたら、階段に血痕があったと」

「はい」

担当の初老の刑事は、小さな眼に半分目蓋をかぶせたまま頭を掻いた。

「・・・こけた時に頭は打って無いよね？見たところ」

古びた畳の客間。刑事は茶にも手を付ける気配は無く、朝の空気に熱は奪われていくばかりである。頼りなげに僅かに霞を漏らす緑色の液体の入った陶器は、右ヒジの向こうに追いやられていた。

「・・・腰は打ちましたけど」

「ふうんそう。で、お父さんは最後にここを見たのは？」

「昨日、一度昼に掃除したつきりですね。そのあと夕方から酷い雨でしたし、そのせいで落ち葉がたくさん落ちてしまつて。朝から息子に掃除させていたんですよ」

警察に受け答える藍の父は、困ったように眉を下げるその仕草さえ、貫禄漂う人物だった。

堀の深い顔立ちに、きりりとした眉。栗毛に灰茶の瞳と色彩は甘いの<sup>へーゼル</sup>に、まるで任侠映画に海外マフィア役で出てきそうな雰囲気<sup>ヘーゼル</sup>を漂わせている。仕事となること、これで袈裟を纏うのだ。

頭を剃っていないのも、この風貌があるかららしい。なるほど、前髪を下ろすとやや緩和される気がする。

『そうだよー、これで頭剃っちゃったら、坊主と言うよりスキンヘッドの怖い外人だもんねー』

身長は相手の警官の方が高いにも関わらず、その雰囲気<sup>ヘーゼル</sup>に恐縮して、聴取は現場に遅れて駆けつけたベテランらしい刑事が応対していた。

「昨夜、乱闘などがあつたとかは？」

「寝てたので何とも言えませんが、無いと思いますね」

「ご家族は何人家族で？」

「母と嫁、大学生の娘も居ますが、それはもう家を出ているのでいません。あとは、こっちの藍と私とで五人です。」

「――藍、お前はもうご飯食べて学校行きなさい」

「そうですね。そちらはもういいですよ」

どうも子供嫌いらしい刑事は、犬を追い払うような仕草で左手を振った。それに藍はむっとした表情を見せたが、父の視線を感じて立ち上がる。

「……失礼しました」

梓は去り際にきちんとそう言う藍に、僅かに感動した。（さすが寺の息子……！）



挿話：アナタとワタシ

「この家はなんでしょうね」

辻は実に楽しそうに、細い目をさらに細めて呟いた。俺に言うてんのか？「そうですよ。今ここ先輩しかいないじゃないですか」

「住職、見ました？」

「外人だったな、で？」

「いやいや、めずらしいなーって。出来るんですねえ、外国の方でも」

「そりゃ免許があれば出来んだろ。あんま余所の家に、興味深々で突っ込むなよ」

「わかってます。わかってますよお」本当に分かっているのだろうか。

この新人の辻という男、どうにも緩い。タツパはあるくせにやけにヒョロ長く、まるで特大のエノキダケのようである。

一応スーツは着てきたようだが、朝早くに呼び出され急いで着たらしく、よれよれのしわしわだ。親か何かからのプレゼントだろうか。身の丈に合わないブランド品の、上等なものに見える。もったいない。

「でも、先輩もこの辺地元なんですよ？」

「地元っつーか……」

廊下の向こうから、ちらりと学生服姿の少年が見えた。これから登校するらしい。俺の視線に気づくと、悪目立ちする金色の頭を下げて会釈する。随分と日本人らしいその行為に、こちらのほうが慌ててしまった。

「……たぶんさっきの子後輩だ。あの制服、見覚えがあんだ」

「めちやくちや地元じゃないっすか。じゃあここも知ってるんですよ？」



好奇心に煌めく瞳。（しかしいかんせん、眼が細い）見上げなければいけないのもむかつく。文章ではわからないので正直に言おう。俺は背が低い。（こいつよりガタイはいいけど）

「……この住職はハーフだよ。父親がフランス人、この寺は母方のほうの寺を継いだんだな」

「じゃあこの息子はクォーター？でも、四分の一じゃ金髪碧眼はそう生まれないですよ遺伝子的に。あの子まんま外人じゃないですか」

「同郷のフランス人の奥さんもらったんだよ。その奥さんも、旦那の戸籍に入ってたからもう日本人だな。仏系日本人一家なんだ。純粋な日本人は祖母さんだけ」

ふんふんと頷き、辻は言葉を続けた。

「すごい偶然ですね。あるんですねそういうの」

「それだけ日本が住みやすいってことじゃないの。義務教育があつて、何だかんだ言つて年金は出る。犯罪はあつてもすぐ捕まるし、

衣食住には質のいいものが一般的に出回ってる。まあ、フランスも、国運営の託児所があったりするから、子育てだと五分五分かもな。教育には力入れてる国だし。治安の面では日本には敵わねえだろ」

「今なんか、日本文化ブームですしね」

「そのブームが始まる半世紀前から、この家はこんな家なんだけども。でもまー、共通点もあるからじゃねーの。日本人って、食と衣はすげえ大事にするじゃん」

「そうですねー特に食べ物関係って、問題起きると凄い怒りますもんね日本人。ちっさい祭りの出店でも国の許可居るし。五十年近く前なら、まだ女性も尽くし上手だし、そこに惚れたんでしょうかねー」

「……俺も五十年前に生まれたかったわ。今の女は強い強くて」

ふー……っと、長い溜息を吐く。

「ああ、そういえば言いませんでしたけど、その額のん、彼女ですか？」

「ああそつだよ……チクシヨウネイルって凶器だぜ。気をつけるよ」

「目ん玉くり抜けそつですよね」

「言つなよ……怖いだろ」

「話戻りますけどー」足が疲れたのか、壁に背を預けながら辻は続けた。

「この辺つて、高級住宅街ですよね」

「そつだな。暇な爺さんばあさんしかいねえよ。老後の金持ちの家が多い。あとは畑だな」

ベットタウンとして栄えるこの街は少し行けば高速道路にバス市電地下鉄と在るにもかかわらず、この辺はまるで別世界の様に閑散としている。昼間も道を歩く人は散歩の老人程度だろう。この道に人が往来する時といったら、近所の小学校の下校時間くらいである。当然犯罪率も少なく、あるといったら空き巣程度だ。

そう考えると、寺営業のほうはやりやすいのかもしれない。

「周さんも、不良の乱闘とかは考えてないみたいです」周さんとは、今住職と話している上司である。「でもなんか、物騒ですよ、最近この街」

「まあな。こないだは女の子が歩道橋から車の群れに落ちたし」

「そうそうそれですよ。あれ、自殺じゃないんでしょう？周さんに聞きました」

「殺人未遂だよな、そうだとしたら。やだなアここがそういうふうになるのは」

「でもそういうのって、重なるもんなんですよねえ。不思議なことに」

『不思議なのはお前の頭の中だよ』と口に出そうとしてやめた。

辻は予想よりずっと、頭がいい。知識も豊富で理解力も早い。それは日常に反映できないから馬鹿だけれども。

きつと言わなくても分かってくれるだろう、俺の普段の言動で。そうこの馬鹿には願っている。

最後に、辻はのほほんとした声で言った。

「俺達、何か起こった後しか何にも出来ない愁傷な身分ですもんねえ」

これくらい呑気な物言いが出来るくらいが、ちょうどいいのかもしれない。

「やっぱり、女の子にしておけばよかった」

兄は不器用な人だ。わたしの数段上、社交性があるように見えて、実のところわたしの数倍気疲れしている。

わたしは知っていた。あの人の笑顔は、その『社交的な』あの人の時だけのものだ。普段の、特にわたしの前のあの人は、どちらかといえば無表情で平坦な感情の起伏をした人物だった。

そこにわたしは、自分との共通点を見つけて嬉しくなったりするのだけだ。

兄はとてもめんどくさがりだ。

わたしもそうだが、興味のあることにしか全力が注げない。その分、好きなことはいくらかでも集中力が続く。その他は本当にどうでもよくて、その姿は他には異常に見えるらしい。

嘘じゃないの。好きなことは、いくらかでもいつまでも好きなの。そのためならいくらでも時間を割いたっていいの。

凜は、わたしに会う十四の秋までたった一人の妹の存在を知らなかったという。

凜とわたしは、まだ赤ん坊のころに両親の離婚によってそれぞれに引き取られた。

離婚と同時に、わたし達は県をまたいで離れてくらすこととなったのだ。

わたし自身は、定期的に母と会っていた。わたしを引き取った父は、わたしが小学校に上がるころには再婚して妹も生まれていたけれど、それは両親双方の方針だったし、わたしは中学に上がるまでは、半ば義務的にそれに従っていた。

そう、中学に上がるころである。それは小学校卒業祝いに会った時だった。

わたしは凜の存在を知っていた。父は、凜の存在を隠そうとしなかったからだ。ただ距離があるし、まだわたしには早いのだろうとその時まで黙っていた。

進学。その節目は、わたしにはとても都合のいいものに思えた。今なら言える。今まで黙って従うばかりのわたしの、母への最初で最後の自己主張だった。

『凜に逢いたい』

それは思いのほか、大きな波紋をもたらした。きつとこの言葉は、図らずとも母にとつても、切っ掛けになったのだ。母は波紋の波がゆるゆると水面に融けていくように、実に自然に連絡を絶った。

恐らくめんどくさかったのだ。その血を継いだ、わたし達兄妹の共通の意見である。だって自分たちにもそういう一面はあるのだ。こんなところで血の繋がりを感じなくなかった。

女のわたしではなく、男の凜を引き取ったのもそのためだ。恋人とのセカンドライフを楽しむには、相手と同じ男のほうが、何かと都合がつく。時が来れば女は金がかかることを、母は身をもって知っていたのだ。

わたしは母の一言がどうしても忘れられない。

「やっぱり、女の子にしておけばよかった」

帰り際に朗らかに笑って、わたしを抱き寄せ耳元で言った言葉である。

彼女は面倒だったのだ。邪魔だとさえ思っていただろう。息子を養い、娘に会うのは義務だった。そんなときのわたしの一言は、十分な理由になったのだ。自分の感情と、成長した娘。「もう母親なんていらなんでしょう？」そういうことだ。少なくとも、わたしにはそうとは思えない。

わたしは兄にどうしても会いたかった。きっと、凜もわたしの存在を知っていれば同じことを思ってくれただろう。だからわたしは十四の秋に会いに行ったのだ。

狭い部屋の中で十月十日、寄り添っていた同い年の兄に。



「ミツキ、休みだつて」

「ミツキ、休みだつて」

めずらしく険しい顔でなつちゃんが言った。

「・・・心配だね。ミツキいつも元気なのに」

「精神的なのじゃなきゃいいけど・・・」

「・・・」

こればかりは何とも言えない。なつちゃんはケータイを開けたり閉じたり手で遊びながら、たまに開いて画面を覗き込む、といったことを繰り返している。パチツ、パチツ、と鳴る音が少しうっとうしい。

「なつちゃん、大野さん睨んでるよ」

「・・・んん・・・」パチツ、パチツ、

「・・・ちよつとウルサインだけど」

大野まこと。彼女は、見るからに女子高生ギャルといった感じの子だ。普段はそんな気の強い子ではないのだけれど、なぜだかわたし達を目の敵にして何だかんだとつかかってくる。

そう、あの日のことも、彼女たちのグループとのトラブルが原因だった。彼女はクラスでも特に目立つグループのまとめ役だ。「何？酒氏さん休みなのー？へー」

ライバルが居なくて嬉しいのだろう。ご機嫌で彼女は今日も、わたし達に話しかけてくる。

「どうせ寝不足とかの理由でサボりでしょ？やだ、あんた達、西藤だけじゃなくって酒氏までお盛んなわけ？」

いいよね。小金持ちは。財布が重いんじゃないの？今頃ラブホのベットで札束数えてたりして」

「だから西藤ちゃんもその兄貴もエンコーなんかしてないって何度言ったらわかんよ！青島のヤロウと歩いてたのは人違いだっつーの！何？昨日言ったことも忘れたの？あつたま軽いわね中身詰まってるの？ベンキョーしなさいベンキョー」

あらかさまな中傷になっちゃんがいきり立った。機嫌がいつもより悪いからか、勢いも三割増した。いつもの光景に、わたしはお約束の溜息を吐いた。どうやら、現国担当の青島先生とわたしの噂が立っているのだ。

きっかけは、青島先生のパステースの中にわたしの写真が入っていた、という噂だった。どうやらそれは真実らしい。好奇心でわざわざ確認した生徒がいたのだ。でもわたしには、それが“わたし自身”とは思えない。

次に、青島はわたしを鼻屑している、と言い出した生徒がいた。そんなことはない。そう言っても火に油、鎮火など夢のまた夢だ。

しかしなっちゃんに言わせると、それもあながち間違いでもないらしい。

「こないだのテストでさ、西藤ちゃん消しゴム落としたじゃない？」そんなこともあったっけか。

首をかしげると、なっちゃんは呆れたように「西藤ちゃん本当興味ないのね！」興味の無いどうでもいい出来事はすぐに忘れてしまう性質なのだから、しかたない。

「そこでさ、青島わざわざ拾って、埃はらって、西藤ちゃんに手渡ししたじゃない。机に置きやいいものを、わざわざ西藤ちゃんの左手にポンッて」

「・・・・・・・・それで？」

「で、一言。『気をつけろよ』」  
「・・・・・・・・」

で？という話だ。

「でも普通、ただの生徒にそこまでする？青島って、対・西藤ちゃんだと、さりげない仕草にそういうのが滲み出てるのよ。鼻肩っていうのは違っにしても、あれはそういう眼で見てるよ」  
「・・・・・・・・」

女の感というやつだろうか。わたしはどうやら鈍いらしい。女子高だからして、この学校は女子比率が異常に高い。そんな女の群れには、一教師の一時の気の迷い程度、お見通しなのだろう。

「ねえ西藤、それ、アンタの兄貴でしょ」

そもそもわたしは興味が無い。興味が無ければ、それはわたしにとつて不必要なものだ。しかし、そうも言っていてられない事態が起きた。それが三日前のあの日のことである。

「ちよつと聞いたんだけど、青島ってまだ中学の先生してたところに生徒襲つて首になつたんだって」

「うっそまじで！」

火に油、ならぬ灯油、否、ガソリンだ。そこにさらに薪を投げ込んだのが大野さんだった。

「知ってるそれ」わたしは自分の耳を疑った。

「ねえ西藤、それ、アンタの兄貴でしょ」

「アタシ、見たよ。昨日、青島と歩いてたでしょ？」・・・わたしじゃない。

「じゃあアンタの兄貴？双子なんでしょ？そっくりね」

「男の売春は罪にならないって言うから、安心なんじゃないの？」

「ちよつと大野ッ！」声をあげたのはなっちゃんだった。

「兄貴に似てるその顔で誘つたんでしょ。やーね」そう言う、大野さんの顔は憤怒に燃えるように真っ赤だった。

奥歯を噛みしめ、そう大きくない声で呟くように言葉が飛び出す。放課後の騒がしかった教室は、いつしか静まり返っていた。

わたしはピンときた。どうやら、こんなわたしにも女の感という

ものは一端にあつたらしい。

大野さんはたぶん、恋をしている。それも青島先生に。

「いいかげんにしなさいよ……大野」静かに、ミヅキが席を立った。

「最低よね。青島もさあ……まさか男相手とか、どんだけのことしたらそうなのかしらね」

謂れない中傷に興味はなかった。想いなんて目の見えないフワフワしたものが原因なら、真相は本人しかわからない。もし、青島先生がわたしを好きだとしても、わたしにはその気はないのだから告白でもして来ればまた違っただろうが、青島先生は何も言っていないのだ。まだ、わたしは当事者と傍観者の間をうろろしている。しかし、それに凜と、青島先生の過去という具体的なものが発生すればまた別だ。

もう興味云々の問題ではない。わたしは事実、ぽつねんと立ち尽くすことしか出来ない。

ちょうどその瞬間、ミヅキの放った音が響いた。

わたしは兄に会いに行ったあの日、人間を見る目を無くした。

魔法使いは確かにわたしと兄と引き合わせてくれた。しかし、その対価というようにわたし達兄妹は、人を人と認識できなくなった。これは呪いだろう。あまりのことに、わたしは大好きだったスポーツもやめてしまった。チームプレーがで居ないわたしが、チーム

に居られるはずがなかった。

だけれど、容姿が分からない分、より対人関係には内面の相性が現れた気がする。短気で男前なミヅキと、明るいなっちゃんは、そうして出来た親友だ。

凜はわたしが唯一視覚的に『人間』に見える人で、たった一人の大切な兄だ。魔法使いのことは憎んでいるといい。しかし自業自得といえればそれまでなのだ。

凜に会いたいと願ったのはわたし自信。兄に会いたかった。この気持ちを共有できる、同じ立場の誰かが欲しかった。見たことも会ったこともない兄だから、愛していたかと言われると、何も言えない。

ただ双子という繋がりには、他には無い何かがあるんじゃないかと思った。

わたしは興味のないものはどうでもいい、という性質である。わたしはまだ見ぬ兄に、多大な興味があった。

今ならそれ以上のものも有ると、胸を張れるだろう。

兄の特異体質も、それによって、かつてそういうことがあったことも知ってはいた。それが青島先生相手だったというのは初耳だったけれど。

どんな偶然なのだろう。兄を辱めた人が、わたしの近くに居た。そしてその兄は、その男と歩いていたという。ついでにその男は、わたしに好意を抱いているらしい。

なんだそれは。偶然なんてもんじゃない。そもそも兄は、県を隔てた遠く向こうに居たはずだ。それがなんで、この街に居る。そしてなんでわたしはそれを知らない。

連絡なんて簡単に取りれるのだ。

凜に、わたしに隠さなければならぬ何かがある。それをしてい  
る。そうとしか思えなかった。

じゃあそれは何だ？と、考えたときに、浮かんだ人物。

たぶんきつと、パステースに入っていた写真は、わたしによく似  
ている誰か。

青島先生。

「家庭の事情、だつてさ」

（知ってるわよそんなことっ！）

まことは手のひらが痛むのも構わず、壁をバシンと叩いた。裏庭に面した渡り廊下。プールに続くそこは、今の季節、木の葉を被っているばかりで誰もきやしない。部活動が活発なため、この学校はきちんと体育館と小さなプールがあるのだ。

（知ってるわよ！）

（なんでこうも上手くないの）

（なんで私ば　　っかり！）

そもそも間違いは、あんな男に惚れたからかもしれない。どこがいいかなど、自分でもわからないのだから。

前に聞いたことがある。「先生、好みのタイプって、どんなですか？」

まさか自分が、そんな会話を振られるとは思わなかったのだろう。

驚いた顔が可愛かった。

私の髪が長かったからか、はたまた誰かを連想したのか。先生は小さく、

「ショートカットかな」と言った。

（知ってたわよ・・・）

軽い気持ちだった。少しでも知りたくて、手を出した。それだけだった。「教えてあげるよ」、と言われたから。

どこの誰かなんてわからない。もしかしたら、人間ですら無いかもしれない。そんな彼はこうなることをわかっていたのだろうか？

ちよつとした、おまじない程度の気持ちだったのに。それがまさか、こんなことになるなんて。

今日も、先生を見ていない。（くそっ・・・）



追いこんでいるのは自分。そんな私を見て、あの人はどう思うか。誰が言ったのか。愛は思いやり、恋は下心。上手いかわなくなると、どうして自分の体は勝手に動いてしまう。殴った手が痛い。殴られた頬が、心臓が痛い。  
(なんで私じゃないのよ！)  
魔法使いは意地悪だ。

「よかったね。今日、青島も休みだったさ」  
なっちゃん言葉で、ハッと我に返った。

「・・・・青島先生が？」

「家庭の事情、だつてさ」  
「・・・・」

ミヅキの欠席理由は風邪だという。熱が39 があると本人じきじきにメールが来た。そんなことをしているなら寝ていると、わたし達は揃って返事を返したが、どうやら暇で暇でどうしようもないらしい。メールなのをいいことに、ちよくちよく話題を振ってくる。さすが、女の喧嘩にグーで殴ったミヅキ嬢。高熱のくせに意外と元気だ。

「帰りも病院寄るつしょ？」

「そうだねミヅキが風邪だから」

ミヅキはあれから、毎日放課後に山崎さんに会いに行っていた。今日はミヅキの代わりに、わたし達で山崎さんには我慢してもらおう。

しかし、青島先生が欠席というのは気になる。わたしは偶然というものに敏感になっていた。

(凜・・・・・・・・)

凜が黙っているなら、終わるまで待とう。今すべきは見守ること  
静観することだ。

(早く・・・・・・・・早く・・・・・・・・) 早く終われ。

魔法使いはまた魔法を使いました。

今度はやさしい女の子。

友達のために腕を振ります。

はてさて、立派な魔法使いになるでしょうか？

どきどき

どきどき

どきどき・・・・・・・・・・。

「…………褒められることはしてねえよ…………」

携帯が鳴ったのは、画面の左端の時計の長針が、ちょうど十一時を指した時だった。

マナーモードにしたつもりでそのままだったらしい。熱に茹だる頭を振って、酒氏ミヅキはキーを押す。（いま、病院で、すつ、と）  
「…………ふ…………」

毎日病院なんてものに通っていたからか。昨日の夕方から出た熱に辟易しながら、ミヅキは羽織ってきた厚めの上着に身を沈めた。

（山崎さんに会って行こうかな）

診察は終わり、あとは帰るのみだが、どうしようか。どうせ施設は同じだ。すでに伝染する時期は過ぎていると言われたし、顔だけでも見に行こうか。

思い立つたら吉日、とばかりにミヅキは立ちあがった。ここ数日で慣れた廊下に行く。歩いているとたんに上着が暑くなったが、荷物が増えると余計だと我慢した。

ミヅキは殿堂入りの短気である。思わず級友の心無い言葉に激怒し、とつさにパーでももちろんチョキでもなく、乾いた粘土の塊のような、グーの拳で殴るくらいの短気である。少女の柔肌にめりこんだ小さな拳は見事にテクニカルヒットを飛ばし、机の群れにボクサーも真っ青にふっ飛ばした。火事場の馬鹿力だ。そこからまさかの掴みあい発展したのは、当然の結果である。

しかし彼女には、その短所を補う行動力がある。

この時間だと、梓の母はまだ仕事だろう。もしかしたら、父親のほうと初対面、となるかもしれない。ノックをしたが、返事は返ってこなかった。

白い扉は軽く引くだけでスーツと道をあける。すぐに目に入ってきたのは、カーキ色をした男の上着の胸元だった。

「うわっ、すいません！」

飛びのいたのは相手のほうだ。扉を開けようとした格好で固まっていた青年は、慌てて道をあける。(・・・誰だろう)

見たことない顔だった。温かみのあるクリーム色の壁の中、青年の真っ赤に染めた髪が映える。高校生だろう。なかなか整った顔立ちをしていた。

扉の前を動かず、自分を見てくる女に困惑したように青年は身動きする。

「えっと・・・オレもう、帰るんで」

「ちょっと待って、どちらさま？」

ここは曲がりなりにも、嫁入り前の淑女が意識不明で横たわる部屋である。病院職員が、そう簡単にも性別を入れるとも思えない。不躰な質問だったが、青年は簡潔に答えた。

「事故の時、その場に居ただけで、どうなったか気になったから見舞いに」

青年は困ったように頭を掻いて、病室の椅子におざなりに置かれた、見舞い用の小さな花束を指した。

「・・・山崎さんを病院に運んだ人？」

「その場に居て近くで見かけただけです。救急車呼んだのは他の人」  
いかにも不良な外見に反し、思っていたよりもずつと堅実な敬語で彼は話す。

「目の前落ちていったんで、気になって。オレあの時犯人捕まえるのに必死で、なんも出来なかったから・・・」

そこで初めて敬語が崩れた。目の前の女が、自分と同世代か、年下程度だと気付いたのだらう。そこでミヅキも思い出しす。(確か・

・・・)

「アンタ、事故の時の・・・」

(なんてこった)失態である。友人の恩人と気付くと、ミヅキは迷いなく熱でふらつく頭を下げた。

「なっ・・・!」

青年は絶句して顔まで赤くし、うろたえる。

「別にオレ・・・なんも・・・」

「アンタのおかげだよ。君が止めてくれなかったら、山崎さん居たまれなかった」

「・・・」

「ありがとう」

「・・・褒められることはしてねえよ・・・」

不満そうな彼に、ミヅキは一転。眉を寄せた。

「・・・せつかくの人の気持ちをいらないってどういうことよ。

謙遜なんていらないわ。出ちゃった感謝の言葉だからさ、男らしく潔く受け取りなさいよ」

感謝を受ける道理はあっても突き返すとはどういうことだ。持ち前の短気が発揮されたストレートな言葉に、さらに青年はぶすくれた顔を晒す。

「はつきりしない男ねえ!もうありがとうって言ってるんだからそれでいいじゃない。アタシのありがとうは、山崎さんの代理のありがとう、なんだから」

「・・・」

彼は何か言おうとして、口を閉じた。

「それでいいのよ。黙って受けときなさい」

「なんで偉そうなんだよ・・・」

「アンタがあんまりにも情けない顔してるからよ」

青年はミヅキから眼をそらし、入り口脇の鏡を見た。そこにはベツトと、点滴につながれた梓が見える。それを見ながら、彼は脱力したような深いため息を吐いた。

(・・・言いきった)ミヅキを妙な達成感と疲労感が襲う。(そうだ・・・アタシ熱あるんだった・・・)

今の今まで忘れていた事実を、吐く熱い息とともにやりすごした。  
(・・・アタシも帰ろっかな)  
そんな時だった。

カシャン

何かがぶつかる音がして二人は同時にそちらを見る。

「・・・なんの音・・・」

見れば、点滴がベットの淵にもたれかかり、斜めに傾いていた。たゆんだ管が、ベットに届くことなく揺れている。

「あっ」足が動いていた。

気付けば白いシートにくるまれたそこに手をつき、二人揃ってその光景を網膜に焼き付けていた。

幻じゃない。

「山崎さん・・・!」

「おい、大丈夫か」

彼女はそろそろとこちらを見た。

「・・・酒氏さん？」

「そうだよ・・・っ」

魔法使いが魔法をかけた。



「……なんだって言うんだ……」

「……なんだって言うんだ……」

昼休み。藍はこそそと金属の塊をポケットに忍ばせ、トイレの個室に籠城していた。誰も居ないのを確認してそっと、画面を開く。学校で携帯電話を使うのは初めてのことだ。

『めずらしいね。いつも家に置いてきてるのに』

「朝あんなことがありましたから……ああやっぱり」

【メール一件】の表示。

校則で、学業に無関係な物の持ち込みは禁止されている。中には隠れて持ってきている生徒も居たが、藍は例のごとく、それを破ったことは無かった。しかし今日は今朝のこともあり、迷った挙句に電源を切って忍ばせていたのだ。

ここ数日、トラブルが多い。この生霊女子高生の事故を皮切りに、今朝の血痕だ。そこで冒頭の、『なんだって言うんだ』の台詞に繋がる。

少し前までは、大きな出来事と言えば自分の進学か姉の一人暮らしデビュー程度。それくらだったというのに。

何かと気苦労の多い少年は、メール画面を開いて眼を丸くした。隣りから覗き込んでくる生霊が邪魔で仕方がないが、それどころではない。

『ちよっ……ねえ！なんで酒氏さんのメアドゲッチュしてんのさ！私というものがあらながらこの浮気者っ』



「ちょっと黙ってください」

『なにさ女子高生キヤラはボク一人で十分じゃあないか。被るんだよ！』

「山崎さん、うるさい」

『うるさいって漢字で五月の蠅って書くんだよ！？虫かいボクはいや無視がこの状況は！』

「・・・・・・・・」

『うまいこと言ったのに誰もつつこんでくれない！なんだいカチカチカチ画面ばかり見てえ！そんなに見ても三次元も二次元もひっくり返らないっつーのっ』

メール画面なので、その先にあるのはれっきとした三次元である。

「ちょっと山崎さんこれ見てくださ『また無視か！』」

【12:22

(酒氏 ミヅキ)

件名(山崎さんが)

山崎さんが意識を取り戻しました。

坂城くんも知りたいかと思って。

本当はもう少し前にわかってたんだ

けど、諸事情で今の今まで報告出

来ませんでした、ごめんなさい。

「返信してみます」

藍は再び操作を始めるが、梓の右手がそれを制す。「山崎さん？」

『いいよ、後で』

「何言ってるんですか。良くないですよ」

『いいの。何かの手違いだ。ボクはここにいるんだから!』

そう言って梓は腰に手を当て。仁王立ちで自分の存在を主張して見せた。

「だから確認しないと」

『向こうも迷惑だよ。今は平日の昼間なんだ』

藍は矛盾を感じ取った。ふつつと、怒りの感情に似た腹立たしさが湧いてくる。

「山崎さんが良くても、僕が良くないんです」

睨みつけるように、梓を見上げる。

自分の顔を見ても、と言わんばかりに、ぐつと真つ黒い画面になってしまった携帯を突き付けた。昼間のトイレというものは意外に明るい。暗い画面は、立派に鏡の役割を果たした。

ややあって、梓の手と、体までが一步離れる。

「僕も無視したりしませんから。必要ならちゃんと話だって聴きます。最後まで付き合いますから、お願いします」

『……うん』

梓は小さく頷いた。

藍は放課後になると早足で帰宅し、鞆もそのままで鍵だけとって、すぐに自転車にまたがった。

住宅街を抜け、大通りを横切って、例の歩道橋の下を走る。

梓は昨日と同じように、相変わらず妙なバランスで後輪にまたがっていた。

『どこ行くの!?!』

「Y女子高です！」

「ワッ」

キキッ

言った途端背後を急なGが襲い、慌てて藍はブレーキを引いた。

「ちよつと、山崎さん……」

藍の背中の制服の布を握りしめたまま、梓は噛みつく。『病院じゃないの!?!』

喚く梓に、少しばかりのいたずら心が湧いたのは、仕方のないことだろう。

「あのですね、山崎さん」藍は意外に負けず嫌いだった。

「誰が、いつ、病院に行くと言いましたか？」

藍が小さく笑う。魂が虚脱したように固まる梓に、笑みが深くなつた。。

『……ああもうつ、進行方向前方!全速力っ!』

「…………山崎さんが、眼を覚ましたというので。」

『あ！ストップ！ストップ！止まれアイ！』

「ギャツ制服が伸びる！」

Y女子高まであと200mといったところで、梓が藍の裾を引いた。『いやあそこ！西藤さんがいた！』

「西藤さん！」

大中小の、中の少女が、前方から歩いてくるところだった。彼女は一瞬、驚いたように立ち止り、すぐにこちらに駆け出す。

「どうしたの？」

「…………山崎さんが、眼を覚ましたというので。何か知ってるかと」

「……………」

西藤はグツと、眉を寄せた。一瞬のことだったが、困惑と怒りが混じったその表情に藍は驚く。

すぐにもとの無表情に戻った彼女は、じつと藍を見た。

「あの…………？」

『……………』

梓はその姿に既視感を覚えた。そういえば、彼女をこうやって見るのは初めてかもしれない。彼女は梓にとって、クラスメイトの三人グループの一人に過ぎず、いつも三人の中では一歩引いて立っていた彼女は、外見よりも、むしろその大人しさの方が印象深かった。よく見ると彼女も整った顔をしている。美系と言っていいたろう。あと数年して化粧を覚えると化けるタイプだ。

瓜実顔の色白で、切れ長の目。全体的に細く、腰の位置が高いの

で、制服でなければ少年にも見えるだろう。

異国風にも見える外見。黒髪と黒目が、あまり似合っていない。似合うとしたら……。

『西藤ちゃんって、下の名前はなんだったけ』

(……え?)

藍が困惑した目でこちらを見て来る。

『聞いて。下の名前』

「……あの、西藤さんって、下の名前はなんて言うんですか？」

先程のあの表情。髪をもう少し短くしたら

……。

訝しげにしながらも、爛は答えた。

「……西藤ラン。爛々と輝くとか、絢爛豪華の爛」

梓はその顔を知っていた。

『双子のお兄さんの名前は?』

藍は復唱する。「ふっ、双子のお兄さんの名前は?」

「凜と立つの凜で……ねえ、何で知ってるの?」

爛は今度こそ、はっきりとあの顔を見せた。黒々とした眼が、さらに深い色になる。

「凜のこと、君が何で知ってるの?」西藤爛が迫る。

「やつ、山崎さんに!」

情けなく声が裏返った。

「嘘だ」

嘘ではなかったのだけれど、爛はきっぱりと言い切った。

「君は嘘をついてる。君は兄のことも、わたし達にあったことも何も知らないだろ。誰が君にそれを言わせたの?」

(……そうだ、この目だ。この色) 梓は唾を呑んだ。

「何で君は凜のことを聞く? 何を知ってるの? 凜がここに来てる理由も知ってる?」

比喩ではなく、眼の色が変わった。藍にはそうとしか見えなかつ

た。

質問を繰り返す彼女は気付いているのだろうか。青白い瞳は、なぜだか彼女を神秘的に見せる。

息をのみ、藍は一步、後ろへ下がった。ハンドルから手が抜け、ガシヤンと大きな音を立てて自転車倒れる。下校途中の生徒たちの視線が向けられた。

殺気迫って爛が藍の肩に手を伸ばした。「ねえ、どうい

う」語尾が融ける。

「え？」

爛は瞳を手の平で覆って立ち尽くす。一秒、二秒　時間がゆっくりと過ぎた。

そして叫んだ。

「嫌だっ・・・凜！」

彼女は鞆を掴んで走りだした。

「・・・え？」

その場に置いて行かれた藍は、ポカンとその後ろ姿を見送った。

『藍ほら！』梓が叱咤する。『追いかけるよ！』

『・・・西藤さん足速いな』

梓が感嘆の息を漏らした。藍は必死でペダルを踏むものの、影すら掴めない彼女に汗が流れる。

「陸上部が何かなんですかあの人！？」

『いんや、確か、中学まで男子に混じって野球部に　　』

「ええ！？」

『あ！いた！』

## 子供

「凜どうしたのその怪我！」

「・・・・・・爛」

平日の駅前には、主婦の姿が目立っていた。学生の放課後活動するには、まだ少しだけ早い。奇しくも、細く短いビルの群れの隙間から、あの歩道橋がすぐ側に見えた。

通行人の好奇の眼もはばかり、爛は声を荒げた。

「わたしももう、知ってるんだから！」

凜は、妹がこんなに取り乱したところを始めてみた。原因は自分だ。分かり切っているが、それでもやはり、妙な気分だった。

まだ二人の双子歴はたった二年である。片割れと言えど、二人はお互いがどんな場所で、どんなふうな経緯を経て育ったのかよくは知らない。

凜が知っているのは、父に引き取られた爛は、中学二年まで野球部に居て、現在父違いの妹は小学生、夫婦仲は順調。円満家庭とのことだった。

対して凜は、母子家庭と義理父の居る生活を（正確には、父親に“なりそうだった”人物が居る生活を）二度ほど繰り返して現在に至る。

血を省けば、二人の共通点は多いようで少ない。性格も、似てはいるが爛の方が真面目だし、凜はどちらかといえば無気力で大雑把だ。友人関係も、爛は狭く深く、凜は狭く浅く。

爛は人間好き。凜は人間嫌い。

爛は困った人が目の前に居ると自然に助けるだろうが、凜の場合、まず目の前でそういうことが起こること自体が、うっとうしいと思ってしまう。

頭に巻いた包帯を、隠すように被った帽子を剥ぎ取られ、凜はぼ

うつと声を荒げる爛を見ていた。

「ねえ凜、どうして教えてくれなかったの？」

「……『言うか』『言わないか』だったら、言わない方がいいと思ったから」

「なんでそれを凜が決めるの？」

しかし凜は、彼女がこう突かれると弱いことを知っている。

「俺が爛の兄貴で、爛が妹だから」

「……じゃあ、わたしが姉だったら、どうだったの」

「ちよつと早く生まれただけじゃ変わんないよ。俺は姉でも妹でもこうした」

「同じ男だったら！」

「それでも爛は爛になるよ」

凜にはわかつていた。簡単な問題だ。自分はどうなってもこうしただろう。片割れのこととは分からないこともまだ多いが、それ以前に自分自身のことはよく分かるのだ。どうやっても、二人は兄妹だった。

「兄妹が兄妹を想うのに理由が居る？」

「わたしだって同じってことを忘れないで！」

人の感情は難解なようで、意外に単純だと爛は思っている。嫌なことは嫌で、好ましいものは好ましい。

難しくしているのは人間自身だ。わざわざ人は、理由を見つけようとする。

そんなに理由が欲しいのか？ 爛は想う。

「わたしだって同じだよ！ 凜が大事なのも、凜と一緒にいるためならなんだって出来るのも！」

自分の答えはそれだけだ。

こんな簡単な答えを、どうして自分たちは見失うのだ。

自分によく似たその顔は、今は情けなく眉を下げている。

「どうして忘れるの？ わたし達が違う人間だとしても、そこだけは同じでしょ？」



「……でも、やらなきゃ。変わらないんだ。何もなかったからほら、またこういう結果になってる」

俺は変わりたいよ。凜は言った。彼は爛の視線から逃げた。

「二人でやろうよ」

「それは俺が嫌だ！」

自分がやろうとしていること。人を一人、この世から抹消する行為だ。一緒に？それは嫌だ。

「絶対に嫌だ。俺一人が出来ることを、爛がやる必要はない」

「わたしだって嫌だ！凜が傷つくだけじゃないか！」

「だからといって、二人でやってどうする？どうなる？被害も二倍だ、良いことなんてない。それに俺は力がある。わかってるだろ？お前と俺の力は違う。効果も、使い時も。セイレーンの使い時は、たった今この状況だ。こういう使い方しか出来ない」

「他のやり方を探せばいいだろ！」

「それじゃ駄目だ！」

凜は拳を自分の足に叩きつけた。

「この力ってというのはこういう使い方しか出来ないんだ。俺は今、この力はもしかしたら、この時のためにあつたんじやないかって思ってる。今回のことが全部うまくいけば、俺は楽になれるんだ。」

いいか？爛。俺だって、二年前何も思わなかったわけじゃない。

何度も泣いたし、ずっと寂しかった。お母さんは飯を作って食べさせてはくれるけど、それだけだ。一緒に食事したことはもう何年も無いし、休日はあの人は自分のためだけに時間を使ってるから、出かけたこともまったく無い。そこに二年前のアレだ。

そんなときに爛が来てくれて、俺がどれだけ救われたかわかる？お前にそんなことさせるくらいなら、その前に俺はあいつを殺して自分も死ぬだろうな。お前がやったら意味が無いんだよ。俺が一人でやらなきゃ意味が無い。

当事者は俺とあいつなんだ。お前は俺の妹だったから、その端っこに巻き込まれた。それだけなんだ」

凜はこのように自分のことを吐露する人間ではない。

自分達は、どこまでも真逆なのである。外へ外へと排出するように、感情を制してきた爛に対して、凜はどこまでも内に内にと溜め込み貯蓄し、それを食って生きている。向かい合うように、背中あわせにしているように、あるいは肩を並べたように、鏡のようとは言わないが、紙一重に自分達は寄り添っていたのだ。

自分達の共通点は、多いようで少なかった。この十五年、彼と言う人間は、何を思っ生を廻してきたのだろう。

『寂しかった』

ああ、それが全てなんだろう。

負けた。爛はそう思った。

(・・・そんな風に言われたら、何もいえないじゃないか・・・)

自分は負けたのだ。凜の想いに。自分の想いは、彼より弱かった。彼の想いは強かった。負けて泣いたことは、たくさんある。いや、あった。久しぶりだ、この感覚は。

火山の噴火の様に、腹の底から湧いてくるものがある。くやしい。くやしいくやしい！

耐えるしかないのか。噴火がいつか止まるまで、自分はこの熱さにじっと耐えるしかない。

悔しいの字は、後悔の悔だ。後で悔やむと書く。なら、自分は今、後悔しているだろうか？

爛は雑踏に消える後ろ姿を、黙って見送った。

本当に後悔するのは、あの姿が変わり果てて帰って来る時だ。まだ後悔には早いのだ。

(なら、わたしは )

「・・・西藤さん」

すいません、なんて、罰の悪そうな顔で、坂城藍がそつと爛に声を掛けた。

(後悔しないほうを選ぼう)

爛は藍に向き直り、懇願する。

「君のこと、教えて」

## 願い

「二年前、わたしは凜に会いに行った」

年賀状の住所を片手に『小嶋凜』の名前を探し、彼の居る街に来た。彼の通っている中学校を見つけて、門のところで兄を待ち伏せた。家に行くほど、わたしに勇気はなかった。母には会いたくなかったのだ。会いたいの凜だけだった。

でも、凜はいくら待っても現れない。当然だ。その時彼は、青島先生とのことで学校に来ていなかった。だからわたしは、一度家に帰ろうとした。

魔法使いに会ったのはその帰り道だ。？それ“はわたしに夢を見せた。

「夢？」

「ああ、そう。気付いたら夢を見てた」

必ずしも、寝ている時だけ見るものではない。最初のそれは、まさに白昼夢そのものだった。わたしは確かに、その時魔法使いと会話したはずである。よくは覚えていない。

夢の世界については、わたし達だけのものだから何とも言えない。わたしはその夢で凜に会った。それが魔法使いの魔法だった。それから、凜にはいつでも夢で会えるようになった。

実際に電話とかでもこつそりと連絡をとるようになったけど、でも夢で逢えば姿も表情もわかるから、そつちのほうがずっと多かった。

凜はあのがあつて、あまり家から出られなかったし、距離の問題もあった。夢で会うのは、たった一つといってもいい手段だった。

た。

凜はもう自分の力のことは認識していて、『セイレーン』と名付けた。海で船人を誘い、溺れさせる西洋の妖怪の名前。

人魚とも言われるそれになぞらえて、彼はその夢で逢うことを『人魚姫が足を手に入れた』と言った。

「凜は、童話オタクなんだ」

「童話オタク？」

「ほら、白雪姫の第一版は継母じゃなくて実の母だったとか、ヘンゼルとグレーテルは子捨ての話だとか、そういう裏側の話が好きなんだ」

人魚姫は一つの悲劇の形である。人魚というものは、昔から報われることは無いのだ。八百比丘尼では娘が洞窟の奥に消え、ろうそく屋の人魚は売られていった。

「山崎さんと気が合いそうですね」

『いや、むしろ同族嫌悪だったよ』

「・・・・・・」

呪いに気付いたのは、まずわたしだった。気が付いたらそうになっていた、としか言いようがない。

人が人に見えない。全ての人間は、動き回って言葉を話す、別の違う何かだった。気がつけばそうなっていて、わたしは気が狂いそうになった。大好きだった部活を初めてサボって、学校から逃げるように家に帰った途端、電話が鳴った。

凜からだった。

偶然だったのか、何かを感じたのか。初めて繋がりはつきりと感じて、ずいぶんと安心した。

それからは対人関係が、ぐるっと一回転した気分だった。

表情が見えないから苦手だった電話が、好ましいと感じるようになり、逆に顔を合わせて何かを話すのが苦手になった。部活も、『受験のため』と言い訳してやめた。

支えは凜だった。彼は洩るわたしを進学させるために説得して、わたしはせめての対処として、一番近所の女子高を受験した。

「そこでなっちゃんとミヅキに出会って……」

「ちよつとまってください。魔法使いは、どうなったんですか？」

「いつのまにか消えてた。魔法使いは、わたしにもよくわからないんだ」

凜とは違うけれど、わたしにも力の様な物はあった。凜と違い、わたしはその力を大分小さなころから自覚していて、たまに使う程度だった。

小さな予知能力のようなものだ。少し先だったり、数年単位先だったり、いつ起こることか分からないから、見えても大したことは出来ない。ただ、良い結果が見えれば、それを目指して頑張る、程度のものだった。

見えるのは、何かに集中しているとき。気持ちが高ぶっているとき。眠っている時に夢として見ることも多い。ただ、その場合夢なのか予知なのか、その時にならないとわからないから、あまり活用は出来ない。

見えるのはだいたい数秒から、長くても一分から二分。

「わたしがさつき見えたのは、凜が全てをわたしに告白する瞬間だった」

未来のわたしは戦慄する。そして何も知らずにいた自分を責め、兄を責めた。

それだけの映像だったけれど、十分だった。凜がやること、そしてその結果。

「わたしは……兄が、傷つくのは見たくない」

足を進めながら、爛は自分の手を睨みつけた。

「元凶は、やっぱり魔法使いですか」

「魔法使いがどんなものかは、わたしにはわからない。凜もそうだったはずだけど、もしかしたら凜は、何かに気付いたのかもしれない」

まじない

『君のこと、教えて』その言葉に藍は頷いた。山崎梓の身に起こったこと、彼女が今、ここに居ること、藍自信が、あの場所に居たことなどを話した。彼女は過去から、今現在の状況を順を追って話した。

部活のランニング中らしい学生の群れとすれ違った。梓の体がある病院までの道なりに肩を並べながら、藍はポツリ疑問を零す。

「……なんで知ってたんだろう」

「え？」

『何が？』

向けられた女子高生二人の視線に、藍は頬を引きつらせる。藍は迷い一つも口にした。

「……西藤さんとお兄さんのことを知っていたクラスメイトです。あと、山崎さんの病院に居た西藤さんのお兄さんも、何でそこに居たんだろう」

「……大野さんは、『一緒に歩いていたのを見た』って言うだけ」

「でもそれだけじゃ。その青島先生が、二年前にしたことも何でいまさら噂になるのか」

タイミングが良すぎるのではないか？

『誰かが触れまわってるんじゃないの？』

「誰かが噂を広めてる？」

噂なんて、人が関わらなければただの言葉の羅列だ。人から人へ、伝言ゲームをしなければならぬ。それなら、そのゲームの出題者は誰だろう。そいつは二年前のことを、確実に知っているに違いないのだ。

爛は顔をしかめて、口をへ字に曲げた。

「……まだあるよ。凜が何で、山崎さんを落としたのか」



心なしか、口調が刺々しい。彼女は“梓”が居るだろう場所を睨みつけた。

「凜は二年前のことで動いてる。なら、その噂を広めた人物が自分たちに害あると思ったから、あの歩道橋から落としたんじゃないの？」

「……私がその伝言ゲームの出題者だつて？」

「そんなこと！」

爛は藍の隣の空間を睨む。その反対側、爛の肩越しに、梓は半眼で立っていた。

「そりゃ無いね。酒氏さんも言つてただろ？私は学校にも、そこで起こる教師の痴話げんかにも興味はない。もちろん君にも、君のお兄さんにあつたことにもね」

「そうですよ、酒氏さんも言つてました。山崎さんは学校に興味が無い人だつて。そんな人がわざわざ噂を流しますか？」

「私は決して自分の性格がいいとは言わないよ。けどね、私は少なくとも、そういう部分は学校なんかじゃ出さないって決めてんだ。

地味な優等生の猫被つて、そこそこ生活して。青島の噂なんざ、知らなかったよ。私はアンタの兄貴と同族だ、アンタら兄妹も青島も大野も、私にとっては興味の範囲外なんだよ」

「……山崎さん、怒ってます？」

「ああ腹立たしいね！このボクが！そんなみみっちい真似する人間だと判断されたのが嫌だ。やるならとことんやるよ！」

「……喧嘩なら正々堂々買っつて、と言ってます。やっぱり違いますよ。山崎さんじゃない。そもそも、この人にそんなことする理由が無いじゃないですか」

「……ごめん」

爛のしかめっ面が、拗ねたようなものに変わったように思えた。しかしとたんに、もとの無表情に戻る。また何かを考えているようだった。

止まっていた足をまた進める。

『……ねえアイ』向こう側、黙りこんでしまった人一人を隔てた向こう側で、梓が呼んだ。

『あ、そのまま黙って聞いてね、じゃないと前言ったひとり言の激しい変な人ゝみたいな感じになっちゃうから』

「はあ……」

ため息なのか、相槌なのか。よくわからない音を漏らしてアイは肯定した。

『うん。じゃあまずね、ボクは君のためなら死ねると思う』

「はあ!？」

「なに？」

「あ……いえ」

とてつもなく重い話をされそうな切り出しだ。青くなればいいのか、赤くなればいいのか。

むしろ白い顔で藍は大人しく続きを待った。

『カミングアウトをしようと思う。怒らないでね？不可抗力だから。あのねえ、前に、君に言っていないことがある、って言ったよね』

そんな重要そうな話を、なぜこのタイミングで、せめてこちら側で話さないのだろう。理由は明確かつ簡単だった。彼女自身が、彼と顔を突き合わせてそれを言えるほど、腹が決められないからだ。

『あのね……えっと、たまにボクって、君の心読むだろ。君はそれをボクが取り憑いてるから起こる現象だとおもってるみたいだけどさ……えーと、実は、』

嫌な予感がした。『実はね、君の心の中、ボクにはゼーんぶ筒抜けなんだよね!』今度は叫ばなかった。

『だって君の中、ボクでいっぱいなんだもん!そういうのって恥ずかしいじゃない?言ってるボクも恥ずかしいもんね!あ、なら黙れって?駄目だよ黙らないからね。』

ていうか君、ボクのこと好きなの?ってくらい悩んでくれてさあ、嫌いとは紙一重ってことを心から実感したよ。あの三日間だって、なんだかんだ言いながらも、ちゃんと頭では考えてくれて

てさ』

今、藍は赤くなったり青くなったりと忙しい。とりあえず叫びだしはしなかった。『いつだったか、あの事故のことです、山崎さんは怖くなかったのだろうか』って、考えてたでしょ』

『ボクだって、そりや怖かったさ。』

でもね、あの状況で助けようとした人の声が聞こえて、実際助けてもらって、もうそれで安心しちゃったのかもね。

今は不思議なことに、まったく怖くないんだ。この体になって怖かったのは、ただの幽霊のままってのこと。見えない触れない話せない。もうそれは人間じゃないだろ？そのほうが怖かった。終わったことはもう怖くない。

君に見つけてもらって、本当に嬉しかったんだ。たった一人でもボクが見えて触れて、話ができる。これがいかに貴重で幸せなことだろう！そう思った』

いつのまにか、梓が目の前に居た。最初のあの時と同じ位置だ。

ひよこ色の頭を見下ろし、手の甲で藍を撫でる。名前と同じ藍色の眼が零れそうだった。なんでこの色を間違えたりしたんだろう。

『もっと自信持てよ。控えめなのはいいけど、君は人を一人、それもたった三日間で、知らないうちに救ってたんだ。しかも相手は初対面の年上の女。凄くないかい？知ってた？最初っからボクは、素のまんまだったんだよ。親の前でもここ数年は、可愛い娘の皮を被ってた。君の前じゃ、ただの？山崎梓“だったんだ。これはそうできることじゃない。』

君は、普通のことをあつさり普通にしないで、凄い奴なんだよ』

もう照れたりはしなかった。

爛が隣にいるにも関わらず、そういうことを言える彼女が、やけにうらやましい。

(・・・なんで、今ここでそういうことを言うんだ・・・)

『いやあ、ぶっちゃけ君の反応がおもしろいか

痛い痛い痛

い！ほっぺ抓らないでっ！照れ隠しはもっと穏便に！』

## のろい

魔法使いは子供が好きである。

魔法使いにとって、子供は夢のカタマリだった。子供と夢は「で繋がる。

愛しかった。愛していた。母性が父性が、はたまた恋か。だからこそ子供たちの夢を叶えてきたし、出来るのはそれだけだった。存在意義だったのだ。

しかし彼（と、しておく）は、疑問だった。

子供はいつまで子供だろう？

青少年が一度は考えるように、魔法使いは首をかしげ、そして唇を尖らせる。わからない。

人の多くは、この疑問を永遠の謎として、心に仕舞うこともあるだろう。もしくは自分なりの答えを導き出して、納得するやもしれない。

しかし彼は違う。彼にとってこの疑問は、ある意味で存在意義を、根本からくつがえす疑問だったのだ。

もし、もし、大人のつまらない願いを叶えてしまっていたら。

魔法使いは永遠の子供だった。ネバーランドの住人だったのだ。

彼を作った誰かは言った。

（大人に魔法を使つてはいけないよ。）

その誰かはもう忘れてしまっているだろうが、彼は確かにそれを言われたのだ。

（大人は駄目。だって消えてしまうから。）

きつと消えてしまうのは、魔法使い自身だ。自分が消えれば、次の魔法使いが現れるだろう。

でも、？自分の誰か“が、そうやって子供たちに触れていくのは、我慢がならない。

さて、目の前の子どもはまだ子供だろうか。

人魚姫は泡になって消える。目の前で消えていく。彼は魔法使いであるからして、それを見ていた。

ヒレもエラも無くして、どうして海で溺れずにすむだろうか？奪ったのは自分だけれど、とても滑稽。

どこぞの童話のさまにもあるだろう。一時の激情に駆られ、母はついに子を三人とも失くすのだ。彼はもっと、賢い子供ではなかっただろうか？最初に出会ったときは、確かにそう思ったのに。見誤ったか？

彼は子供の皮を被った大人だった。境遇を受け入れ、状況を判断して、臨機応変に最適な行動と思考を。喚き嘆いても終わったことはしかたない。妙に気持ち悪い食指の動かない子供。

そんな気持ち悪い子供だからこそ、化け物に捕まった。ツギハギちぐはぐな化け物は、あの気持ち悪い子供が何よりご馳走だったよう。かわいそうに、あんなものを食べるから、腹を下して二年もこんなところで一人寂しく。

しかし今はどうだろう。化け物が化け物だったのは二年前の話。子供の大人は何故だか、ここ二年で子供に戻ったらしい。

無鉄砲で身を滅ぼす馬鹿な子供。やがて姿を取り戻した化け物に、罅られ食われ溶かされ一つに。

化け物退治なんて物語の中だけのことだ。化け物はもう飼う時代。身の内に飼って、鎖につなぐ時代だ。なのにあいつは、それをわざわざ鎖を解いて、包丁片手にごっこ遊び。

魔法使いは、重い腰を上げた。今の彼なら、ボク（・・・）も魔法をかけてやってもいいかもしれない。

魔法使いは人から人へ、子供から子供へ、渡り歩くものなのだ。

「魔法使いは、一つだけ願いを叶える」

今、彼女の眼には自分はこういう風に映っているのか。エレベーターの鏡に映った彼女は、細い顎に白い顔で、黒目がちの眼を伏せている。まつ毛は長く、影が出来ているほど。

どう見たって人間なのに、彼女には自分たちは全く別に映っているのだろう。

「願いを叶えたらどこかに行ってしまうんだ。わたしは、彼がどんな人間で、どんな姿をしていたのかも覚えてない。魔法使いは呪い以外何も残していかない。全部消していくんだよ」

軽い音を立ててエレベーターが着いた。辛抱が利かなくなったのか、爛は走り出した。アイはそれを追いかける。

ボクは無いはずの心臓が早鐘を打つのを感じていた。本当に“早鐘”とはよく言ったもので、腹の底に響く様は、大音量の和太鼓か、目の前で突かれる除夜の鐘だ。一回一回がそんなものだから、息苦しくも感じる。

白い手がクリーム色のドアに手を掛けた。ここに、ボクが居る。

「いらっしやい」

枕に背を預け、笑っている自分が居た。アイはボクを見、あちらを見る。散々うろつる彷徨った視線は、一步下がって両方視界に入れることで固定された。

自分の顔を客観的に見るというのは、そうできる体験ではない。

『・・・確かに悪人面してるなあ』

思っていることを正直に言くと、アイからの視線が冷たくなった（気がした）。

「ああ、そちらも、こんにちは」

『あらやっぱり礼儀正しい。さすがボクの体！』

「アンタ黙ってくれませんか」

爛がカツカツとベットに寄り、ぐっとボクの体の肩を掴んだ。指が“食い込んで痛いはずなのに”、“ボク”はまだ笑っている。

「……凜はどこ。魔法使い」

「……一度ボクにかかった子供は、分かっちゃうもんなのかな」

（『え？何アレ魔法使い？中に入ってるの？ボクの体に？』

「自分の体なのに分からないんですか？ちよつと本当に黙ってくだ  
さいよ。学習することを覚えてください」  
（

## 魔法使い

「教えて、凜はどこ？」

「ボクは彼らにたくさんの事をしたね。たー！ー！つくさん。

そう睨むなよ、疑問は全部、ボクのせいにすればいいさ。きっとそれが答えだもの。ボクはどうせ、君達の疑問から生まれて、それを糧にここにあって、そして疑問を生んでいくんだ。夢を持てよ、青少年。子供は大人の希望の種なんだから」

噛み合わない会話である。自分を客観的に見ることは、実に珍しい体験だった。自分はあるな声をしていて、自分の表情筋はああ動くのか。捉えようによつては、不気味な光景である。

（あれは山崎さんじゃない）

アイからそう伝わってきた。なるほど、中身が違えば表情も違うらしい。ゲームソフトと機器の様なものだろうか。普段のボクを見ているアイの眼には、得体のしれない違う何かが映っているらしい。「ボクにとつてもそれは同じさ。過去、君達兄妹にボクは魔法をかけてやった。でもね、ボクはどうしても君のお兄さんが好きになれなかったんだ。わかるかい？あんな得体のしれない子供、気持ち悪くて好きになれやしない。とんだゲテモノだよ。

だからボクはあの時、魔法をかけるのを少し躊躇ったんだ。でも君たちの願いはとても似てたから　つまりさ、こういうことだよ。“理解者が欲しい”。ね？そういうことでしょ？

馬鹿な大人なんかじゃなくて、限りなく自分に近い人。願いはおんなじだったから、ボクは魔法を半分に分けたんだ」

『ボク、魔法使いは好きになれそうにないや』

「……僕ですよ」

何ていうんだろう。（……めんどくさい人なんだなあ……）  
そう、それだ。魔法使いというやつは、なんともめんどくさい性格



をしている。すっぱりハッキリ、モノを言えと。ほら、彼女も困惑している。

「・・・・・・どういう意味？」

「わっかんないかな。つまりね、つまり、こういうこと。

エネルギー削減？ってやつ。ほんとうはね、魔法使いの魔法は一人一回、おひとりさまワンコースなんだ。でも君たちの場合、どうしてもボクは君のお兄さんに魔法を掛けなくなかった。だから双子らしくはんぶんこ。

君はどうやら、魔法を掛けられたのは自分だけで、お兄さんはそのとばっちりを受けたって思ってたみたいだけど、実際かけたのはお兄さんの方さ。その願いはお兄さんのものだ。君の言う呪いって魔法も。

で、とどのつまり君達双子には、それぞれ半分だけ魔法をかけてもらえる権利があるんだ。お兄さんはもう、君を守るために使っちゃったけどね。

で、どうする？半分ならちょうど、人探し程度になっちゃうんだよね。君はどうしたい？疑問を全部解答するのも有りだよ」

「・・・・・・」

「とりあえず、自分が正しいと思う選択をしなよ？どうせ後悔するのは君だもの」

きやらきやらきやらきやら。

引き攣ったように魔法使いは笑った。

「ドイツにいた、とある三兄弟の母親は、屠殺ごつこの果てに、本当に弟を刺殺した長男に驚き、とっさの激情に息子をころしてしまふ。はっ、と我に返り、周りを見れば、そこにあるのは包丁を持つ自分と転がるもの、少し向こうには産湯に溺れた末息子。さてこっとういうお話だ」

グリム童話第一版。あまりの内容に削除された話。

「勝てば官軍。負ければ賊軍。結婚し、女の幸せというものを余すことなく全うした母の末に待っていたのは、地獄絵巻の我が家の様

子。母は子に命をもって教えたのだ、『痛みは必ず返ってくる』と。母と末子は教育の果て犠牲になったのさ」

大仰に腕を広げて、身振り手振りも（といっても、ボクの体の方には怪我があるのでメインは手振りだが）激しく魔法使いは熱弁した。

「確かにここにあるのは、その山崎梓さんの体に、君の兄が魔法使いと呼んだ存在だ。ボクには体が無いからね、少しお借りしているんだけど、ま、次が見つければすぐにでも出ていくさ。

ボクにあるのは、魔法のみ。ボク自身が、どこぞの誰かさんが創った存在だ。ボクにできるのは、こうして魔法をかけるだけなんだ。ボクは呪いなんて知らないし、かけたつもりもない。いつか君達にはそれが必要になる」

『めんどくさい人だね、何が言いたいのか』

アイからさらに困惑した雰囲気伝わってくる。なんだって言うんだ。

「……」

彼には一つ仮説があったのだ。

「ボクは、自分の意志なんて端から持ってない。ボクを求める人が居なければ、何もできないのさ。山崎梓さん、その体を望んだのは君自身だよ。君の体のこの状態を望んだのも、他の誰かでボクじゃない。ボクの意志なんて無いんだ。今のボクは君なんだよ」

魔法使いは言った。

「今の“魔法使い”は君さ」

## 『約束しよう』

『次に会うときは、君が魔法使いだった場合と、君の体が目が覚めた時に、俺が会いに行く場合。約束しよう。君の体が目覚めたら、俺は必ず君に会いに行く。違った場合の時は謝罪させてほしい』

『さて　俺は化け物を倒したら貴方にわかる方法で伝えましょう。化け物を倒すのは最優先事項なので、魔法使いは絶対にその後になります。もし、貴方が魔法使いなら、貴方はどうなるかわかりますか？』

眼を開けて一瞬、ここが何処だかわからなかった。

(・・・ああ、そうだった)

住めば都を体現した部屋だった。あの男の小さな城である。

馴染まない場所で明かした夜は、体を痛めつけるばかりでちっとも休めなかった。細く、長く、息を吐き、凜は天井の木目を見つめる。

(・・・あいつ、本当に馬鹿なんだなア)

高台の寺。あの場所を選んだのは、他でもないあの坂城とかいう少年が居たからである。あそこで押した腕は掴まれて、可笑いことに仲良く二人で転げ落ちたのだ。

そして気が着けばこの部屋にいて。

脳震盪を起こして気絶していた自分を、青島はご丁寧に自分の領域に運び、治療してくださったらしい。(馬鹿だな)

かつての教え子とその教師。当然の行動である。しかし、傷害未遂とその被害者なら？おかしいだろう。

彼ももう分かったはずだ。自分がなんで、この街に来たか。何をしたかったか。あの時一步でも踏み間違えていればどうなっていた

か。

俺は人を殺していたかもしれない。

いまさらながら実感する。怖い。怖い、が……。

(……まだ俺はやれる)

「……やってやる」

実際に小さく呟いてみた。(大丈夫……大丈夫……だいじょうぶ……)

意地になっているのかもしれない。しかしそれでもいい。勢いに身を任せなければ、どうしてこんなこと出来ようか。

小さな男一人消えて、何が変わるだろう？ 答えは簡単、一番に変わるのは自分達だ。人一人犠牲にしても、変えたいものがある。

陸に上がった人魚姫。そしてその姉はどう思ったのだろう。まだ彼女は十五だったのだ。

弟妹は守るものである。これは無条件だ。少なくとも、自分にはそうである。(だが、)もしかしたら責任感と罪悪感からかもしれない。(妹をこうしてしまったのは自分だ)。

身近な自分より小さな子供は、親を手本にするように、自分からも何かを吸収するだろう。それが彼女にとっては結果的に害あるものとしたら。

そんな感情から、彼女は魔法使いに願ったのかもしれない。髪を捧げて、短剣を持って、危険な水面に顔を出して妹を救いに行った。だがしかし、ああなんてこと、自分があの時あしていればあの子は。

救いは利かなかった。所詮、水面に顔を出した程度、陸に居た彼女には届かなかったのである。自分も声を捨て、陸に上がる足を一本骨から裂くほどでないと。

彼女はそうすべきだった。本当に妹を救いたいのなら、そうすべきだったのだ。

魔法使いは、今、分かっているのだろうか。今やろうとしていることの、その結果。彼女がいかに性格が悪いかが窺える。どうせ高

見て馬鹿にしたように笑っているのだろう。

悠久の魔法使いはただ一人、全部知っていてそれを見ている。それだけの力があるのに、何もしない。

だから人は、彼に頭を下げてその力を乞うのだ。

邪魔なのは青島だったが、真に憎いのは、そんな魔法使いだ。もう“次”を考えなければいけない。

『魔法使い（・・・）を（・・）どう（・・）やって（・・・）殺す（・・・）か（・・）否か（・・）』

その時、音も無く目の前の扉が開いた。凜は思わず身を固くする。が、視線だけはぎらぎらと抜き身の刃のように艶めかしく光っていた。

## 『君が魔法使いだった時』

「凜がどこに居るのか教えて！」

爛は叩き付けるように言った。魔法使いは無邪気にニツと笑い、「オッケー」指でマルまで作って見せる。

藍はその表情に女々しく眉を下げた。『今の魔法使いは君さ』その言葉に間違いは無いのだろう。

だって今した顔は、まさしく“山崎梓”だった。

(・・・ああ)

仮説は当たっていた。そして彼の言う通りなのなら、彼はきっとそうして何度も何度も繰り返して見てきたのだろう。今回の様なことも、またあったのかもしれない。

藍の仮説は、梓がこうなったのは“魔法使い”によるものではないのか？というものだった。魔法使いの存在が出たときから考えていたことだ。

彼の言う通りなら、彼はきっと病気の様なものなのだろう。それもしかの様なウィルスだ。一度罹れば、もうかからない。そして、そのウィルスに意志なんて存在しない。

何故だかはわからない。藍はそもそも、自分が一番分らない人間なのだ。梓のように、自分をこうして客観的に見られれば、また違ったのだらうけれど。

何故だろう、同じことを言っている気がするのである。

ただ小さく一言、『寂しい』と。

「山崎さん」

「ん？」

振り向いた彼女は、いやに優しい顔をしていた。心が読めるといふのなら、きっと分かっているはずである。

『ボクはそう柔くはないよ』

「・・・わかってますよ」

（やはり彼女に会ってから、自分は彼女のことばかり考えてしまっている。彼女は自分よりずっと強いはずなのだ。）

彼の気持ちを代筆しているのは、語り部たるボクであるが、ボクはこの時、彼の想いを汲み取れずにいたに違いない。

ボクにあるのは、ファンタジーと、やたら厚い猫型の面の皮、そして持ち前の好奇心と彼への濁った愛である。しかしこの汚水のように濁った愛という名の好奇心は、他でもない彼自身によって濾過ろかされていくのである。

ああ、なんの偶然か。そういえば彼の名前は『アイ』であつた。愛情深いフランス人の母が、それを思つてこの名をつけたのだとしたら、彼以上に、この名で体を表すことは不可能ではないだろうか。

彼は出会つて三分の人間に感情移入し、真剣にその人の行く先を考えられる人間だつた。それが人間か否かはもはや関係ない。

意志疎通ができ、感情が合つて、立派に思考と現状判断、選り好みが出来る物体？は、体があるうと無かろうと根性の曲がつた病原体であるうと美少年の皮を被つた人魚でも化け物だろうが、つまり同じになるのである。

しかし彼自身がそんなに綺麗なのかと言つてもなく、心の底では（このボクが！）耳を塞ぎたくなるような暴言と、理不尽な叫びに満ちている。彼は良い子だから、それを表面には絶対に出さないだけなのだ。

確かに彼をこんなふうにしたのは、親か兄弟か親戚か学校か友人かだろう。それを彼は分かつていて、けれど誰にも責任は問えないことも分かつている。そして、最終的にその“責任”は誰でもない自分の上に降り積もってくるだろうことも、わかっている。

この分かつてしまっている人間が、どうして『子供らしく』出来ようか。彼に無邪気に何も考えず遊び呆ける、そんなことは出来ない。考えてしまう。そんな人だつた。なんて優しい天邪鬼。

？分かつてしまう“から、彼はこんなにも優しいのだ。そして同時に、あまりにも残酷なのである。

ボクはアイとは対極に位置しているのかもしれない。逆に人魚の彼とは、共通点が多すぎた。あの病院で感じたのは、そういうことだったのかもしれない。

童話が好きで、妹が大事で、茶目っ気が合つて、そして特大の猫被りの男の子。

その時、少しイケナイことが頭に浮かんでしまったのは、最早ボクだからうしようもないことだ。

・・・ふと、魔法使いと視線が合った。そつと指を立て、口元に立てる。

ああ、彼女はボクなのか。

人ならざる友人は、なんと心強いものである。

（「ていうかさ、この体大分ボロ雑巾だからね。さっきちょっと動かしたら、なんか変な音したし、君がこの体に返ってきた時ちよつと痛いかもしれないけど、ま、頑張つてよね。ぶっちゃけ、今こつやつて座つてるのも大分キツイし、リハビリとか時間かかると思うよ」

「自分の言動に、自重というのを覚えてください」

それはいつも梓に思っていることだった。）



## 『君の目が覚めた時』

辻 聖は右手を束縛されながら、アパートへの階段を踏みしめていた。

右手に繋がるそれ、自分より一回りも二回りも細い腕は白く、精一杯伸ばされ自分の指を握りこんでいる。身長差があるのだから離れて歩けばいいものを、この少女はどうしてもそうしていたらしく聖は右半身を傾けながら、突っぱねたように、赤さびに塗れたそこを上っていた。

「あっちゃんさ……」

「あっちゃんじゃないよ！あ・さ・こ！」

「……朝子ちゃんさあ、もう夕方なんだけど」

「いいから、わたしんち寄ってって！」

ぐいぐい右腕を引く彼女に、聖は緩く首を振り従った。

朝子は女性とは到底言えず、少女という大きなくくりでは、いささか説明不足である。彼女は今年で七つになる小学校二年生、背中にはまだ綺麗な空色のランドセルがある。

流行なのか、それとも趣味なのか、あの開くとべろんと長いブツのあるものではなく、まるでスクールバックのような形状を、背負えるように仕立てたものだった。長方形の中頃に、カチリとはめ込むタイプの金具が二組ずつ、段階に分けてあるところを見ると、見た目よりずっと収納性はあるらしい。真新しいリコーダーの袋が横から覗いている。

自宅通学の聖には余計に小さく見える室内を。ちょこまかと動き回る真つ青を背負った小人を視界の端に入れながら、聖はトウガラシのように真つ赤な頭を掻いた。

「そこ！そこ座ってね！」

「ああ、はいはい」

犬の顔をした座布団に腰を下ろすと、百均で買ったようなプラスチックの小さなコップが、なみなみと麦茶を収め出てきた。

「聖くんは男だから青ね！」

キャラクターをきらきらしたラメが彩る半透明のコップを見、すぐ横にある彼女の整理された学習机を見、どうやら彼女は女の子ながら青が好きらしいと麦茶に口をつける。自分の家とは違う違和感が、喉を滑って落ちて行った。

ドンッ

ぐらぐらと築三十年は在る壁が揺れた。

「あらお隣だわ」

（母親の真似なんだろうなあ）

「めずらしいのね」

「隣、どんな人なんだ？」

「先生してるおじさん。あんまりしゃべらない人なの。めずらしいなあ、いつも静かなのに」

『珍しい』を繰り返し、朝子もそろそろと水色のコップを机に置くと、腰を下ろしたま呟いた。「めずらしいなあ、あのね、すごい優しい人なのよ？前に野良猫に餌やってるのをみたもん」

そう言った途端、また ドンッ 「きゃあ」朝子の肩が跳ねる。

「・・・まあ、どんな人でも色々あんだよ。お前気をつけろよ？」

「ん？」

「人つてのは見かけによらないんだからな。優しそうなおじさんが本当に優しいかなんて分かんないんだから、ホイホイついてたりすんなよ。俺みたいには行かないんだからな」

「でも聖くんは、優しく見えない優しい人だったんだからいいじゃない」

あまりに的確なその台詞に、聖は思わずハンスアップした。脱帽だ。女の子というものは、いつだって上手である。

『君の目が覚めた時』（後書き）

赤い髪の不良：辻 聖<sup>あきひろ</sup>

聖なる、と書いてアキラ。あきらか、を転じて『聖』になった。  
ぶっちゃけ家族以外に正確に読んでくれないのが悩み。

青いランドセルの女の子：三浦 朝子

通称・あっちゃん。おませで可愛い女の子。女の子なのに青色が好きなのが、ちよつと恥ずかしい。そんなお年頃。お母さんはお腹に赤ちゃんがいるため入院中で、聖に世話になっている。

『必ず会いに行く』

「……どうして」

凜の短い人生の中で、何度この四文字を呟いたであろうか。

いつだって彼は、この台詞を床に叩きつけるように口から吐き出していた。しかし今回ばかりは趣が違う。ポロリと、取り落とし転がるようにそれは口から出てしまった。「……どうして」

目の前には男。それは求めた結果である。きちんと、『青島草平』という国語教師の男だ。けれど。

「どうして」

“青島”は、にっこりと笑った。

「……どうしてアンタが来たんだ、魔法使い」

「ボクは願いを聞いただけさ。それ以上でも以下でもない。代理だよ代理、メロスとそのご友人みたいなもんさ」

「……はは、何言ってるんだ」

願っていた。

「君の願いは、自分にとって一番の障害である？化け物退治“と？魔法使いを殺すこと”だろ？」

大きくない扉に立ち、こちらを笑顔で見つめるのは、あれほど焦がれた男と求めたものである。凜は唇を結び、喉を鳴らして唾を呑んだ。

「……馬鹿だなあ、お前。ぶち壊しにしゃがって」

泣きそうだった。ああ、終わった。そう思った。

中年男の顔で、魔法使いは不思議そうにこちらを見やる。（……

・そんな顔、するなよ）

男の頭には包帯、右頬にはガーゼが貼られていた。笑うと、間抜けに欠けた前歯が見えた。ぐっと眼をつむり、波をやり過ぐすと凜は一転、青島を睨みつける。

「・・・アンタのやってることはいつだって的外れなんだよ。アンタがそうやった時点で、俺のしたかったことは全部終わったんだ。俺は？化け物退治？とは言ったけど、？人殺し“をするとは言っていないだろう？目的には経過が必要なんだよ。過程が大事だったんだ・・・」

青島に魔法使いがくつついた時点で、それは一石二鳥ではなく土崩瓦解、凜にとっての事実上のチェクメイトだった。

苦しい。溺れたのは自分の方か？『やろう』と決めて、その時はこんなにも苦しくは無かった。むしろ、いつか自分はそうなるだろうと。運命だとすら思っていたのだ。

「俺は時間稼ぎがしたかっただけだ。そいつがちょっとでも俺に触れれば、それでいい。こっちは未成年、そっちは立派な社会人。あと三年だ。三年で、俺は十八歳になる。五年なら二十歳だ。それまでそいつを遠ざければそれでよかったんだ。俺にはまだ時間がある。だから、なるべく乱暴に扱われて怪我の五つや六つ付けてくれれば・・・って、思ってた体は張ったのに・・・」

凜は緩く首を振る。

「？人殺し“になっちゃ、爛を守れないだろう？よく考えろよな。分かることだろ？化け物は追い払えりやそれで良かったんだよ。なのにさあ・・・アンタがそれを分かってやってるんならまた別だけど・・・違うみたいだし。子供が好きなら、子供の心を知ってから動けよ。馬鹿だろ」

魔法使いは憎い。けれど、超えてはならない一線があることは、凜はよく分かっていた。凜の目的は、あくまで『兄妹共にあること』なのだ。

「俺はあくまで“被害者”じゃなきゃいけなかったんだ。だから病院の下調べまでして・・・知らないって顔だな？教えてやるよ。そういう場合、被害者には病院の診断書が必要なんだよ。一番手っ取り早い。だからあの日、この辺の病院調べて色々準備して、跡が残ってるうちに証拠とってやるうとか考えてたんだ」

もはや羞恥も何もない。女ではない男の自分には安いものだと思え凜は思う。セイレーンがある自分ならば、完璧に出来上がるはずだった計画だ。

溺れたのは自分の方か。人魚は王子を討った後に海に帰り、まさかもう泳げないとは思わなかった。自分はもうエラもヒレも無くしてしまっていたのか。なんてことだろう。

「どうして」凜はもう一度、この言葉を吐いた。今度は意識的に。「どうして邪魔したんだよ……」

「言っただろう？ボクは代理で来たのさ。伝書鳩の代わりなんだ。所詮、今のボクは鳩程度。君を邪魔する気は無かったし、この結果にボクも驚いてるよ」

「わざとらしい……」

言って、凜は視線で魔法使いを促した。

「どうせ爛だろ？このタイミング。それなら仕方ない、次を考える」

「ブッブー残念。爛ちゃんもだけど、他多数もおまけだ」

「他多数？」

「『わたしは否定もしないし、肯定も出来ない。ただ君がそうしたいならそうすればいい。ただ、過程が違えば結果も違うことを忘れるな。凜がなりたいたい状態と、わたしの理想は違う』」

なんだそれは、と意味を込め言っただつもりだった。相変わらず会話のかみ合わない魔法使いが口にしたのは、片割れの怒りだ。

「……やっぱり、アンタ止めにきたんじゃない」

「いやいや、？他“も聞けば、君は次すら考えなくなるかもしれない。そうだろう？”」

（いいや、俺はやるよ）

想いはそう軽いものではない。何せこちらは、決意を込めて人生を切り売りしているのだ。自信がある。

この想いは、深く、深く。根強く砂上の奥の奥に、根を張り水を啜っているのだ。多少の風にそう簡単には折れない。むしろ、その枝を屈ぐことさえ出来ないだろう。

「『お友達になりました』だってさ」

虚を突かれた凜に、魔法使いはニヤニヤと口元を緩め、続きを聴かせた。

『今回のことで、君の様な友人が居れば楽しいだろうという結果を導き出しました』

『なので、』

『お友達になりました』

「彼らは止めるために伝言を頼んだんじゃないよ。純粹にいや、不純に？今回のことで君みたいな友達がほしいな、と、そう思ったんだって。六十億人の一人に興味を持ってもらえるってのは、まさしく奇跡だよ？君は大人が血を吐いて欲しがる『時間』つてのを、ゴミ箱に捨てるつもりかい？それがなんて勿体ないことか今の君にはわからないだろう？騙されたと思って青春しろよ、青少年」

「なんか腹立つな。アンタら」

不快も露わに、凜は立ちあがる。そう広くない部屋を見渡し、自分の帽子を手にとると目深にそれを頭に被った。昼間でも薄暗い室内で、ぼんやりと帽子のつばの影、瞳が光る。

「そして、こうしてボクらが会話してることもまさしく奇跡だろ？ボクが過去に君を選び、そして今こうして話している。すごいことじゃないか」

「……アンタ、悪い顔してるな。極悪人だ。とんだ詐欺師だよ」

凜は迷わない。嫌悪を露わに突き進んだ。後悔はしない。目的達成のためなら、手段は選ばない。狡猾に生きなくては何もできないのだ。

「そっいつのは名前を名乗ってから言いなよ。俺もあの時、そうしただろう？」

すれ違いざまに凜は青島の頬に口づけ、彼女の耳元で囁いた。

「海の底を泳ぐ人魚の眼をごまかせると思うなよ、山崎さん。魔法使いへの願いはもう使っちゃったんだろ？だからって、そんな中年男に取り憑いたら戻れなくなるかもよ？」

明る以外の土を踏んだ彼の背に、梓は口元を釣り上げて猫の皮を脱ぎ棄て言った。

「……わっるい顔。今キミ、すっごい悪人ヅラしてるよ。鏡見てきたら？」

### 【猫被り】

本性を隠し大人しく見せること。知って居ながら、何も知らないふりをする事。



## エピソード

さて、その時、歩道橋に居たのは五人の学生だった。それぞれ面識などは無い。ありふれた、年齢もバラバラな五人の学生である。時刻は丁度、午後4時ごろ。少しずつ下校途中の学生が零れてくる時間。

眼鏡の女子高生は歩道橋から落ちた。

金髪に蒼い目の男子中学生はそれを見た。

もう一人の蒼い目の少年はその場を何事も無かったかのように離れた。

蒼のランドセルの女の子はそつと下を覗き込んでみた。

赤い髪の不良は慌てて歩道橋を駆け下りた。

これはハッピーエンドをより盛り上げるため、魔法使いがかけた魔法なのだ。

魔法使いというウイルスは、？魔法使い“という病気に感染させ、去っていく。

小嶋凜に感染し双子を再会させ、廻り廻って四日前に山崎梓をあつたし、彼らはこの先、その存在によって何かを変えられるのである。

この魔法が始まったのはきつと、ずっと昔。

むかしむかしのお話、だったのだ。

今のボクにあるのは、ファンタジーとやたら厚い猫型の面の皮、そして持ち前の好奇心と彼らへの濁った愛である。

しかしそれも、いつしか忘れてしまっただろう。魔法使いに意思なんてないのだ。ただ求められるように魔法を使い、そして他を探しに行く。

風に流されるままのタンポポの綿毛に、何処で芽吹くかなんてわかりやしないのだ。

## 魔法使いに愛された恋する大きな子供の結末

男は恋をしていた。

とんだ馬鹿だと笑えるほど、馬鹿な恋だ。

罵るよりも大声で笑ってくれ。本当に馬鹿で馬鹿で、自分で途方に暮れるほどだ。

いつから中年と言うのだろう。まあ確かに中年だけれど。学生時代、誰よりも若さに満ち溢れていた男は、不貞腐れたようにたまにそう考える。

子供の様なところのある男だった。

そんな彼がこの職を選んだのは恐らく必然である。とある、公立中学校の国語教師だった。

柔道に身を焦がした過去。他校との交流会などでは必ず、体育教師と間違われる体格をしている彼は、しかし何故か、『国語教師』だと名乗ると、なるほど、と言われる。日本と言う国は、言葉を大事にする人種だ。彼はそんな国民性を分かりやすく反映した性質をしていた。

そんな男は、当然この年齢、結婚歴があつた。つまり「離婚歴、バツ」だ。

恋やら愛やら情やら、そういったものも知らないわけではない。元妻とは恋と愛はあつた。しかし情が生まれなかった。実にありがちである。

人生というものは一冊の本に出来ると言うが、男の物語はあまりにチープ。すぐに絶版。だって男の人生には『山場』が無かった。読者の興味をそそる山場。物語はゆるやかに上昇し、そして一気

に下降しなくてはならない。男の人生はゆるやかに波を繰り返すのみで、ガタガタと砂利道の様に不安定ではあったがそれだけだ。実に白ける。

そんな男に『山場』が訪れた。ゆるゆると急上昇。しかし男はその急激な上り坂に、これ以上ないほど苦しむことになる。

男は生徒に恋をした。

それは人魚の少年に言わせれば、不幸な事故だった。たまたまその場に居たのがその男。可哀想なほどに彼に焦がれた男だった。

それが彼自身に向けられたものなのか、それとも彼の『中』にあったものにだったのか。それは誰にもわからない。

しかし男はそれを彼自身へのものだとして純粋に信じていた。

ただ男は少し考えてしまったのだ。性別年齢立場すべて抜きにすれば、いかに自分にとって、彼が人間として魅力的か。

彼は同年代と比べ物にならないほど、大人びた                      否、大人

そのものの考え方をしていた。そんな彼が、まさか妹のことだけに子供に戻るのだが、それはまあ、後の話である。

子供の様なところのある男だった。

一時のことに身を任せたことに、男は深淵に身を漬けるほどに後悔する。男はその事故を事故とは思わなかった。男として、人として、大人として、教師として、そして彼に恋した人間としての自分の落ち度だと思った。

『山場』の急降下はここから始まる。

二年後。男は私立の女子高に同じく国語教師として赴任。あまりのことに哀れに思った、知人からの紹介だった。若年のころ、海外に数年留学していたのが良かった。

一度地を突き破り、地下を虫の様に這ったが、それも上昇へ向かったかと思われた。だがそれはもしかしたら、地の底ではなく、深海だったのかもしれない。月を目指したと思った魚は、より深くへ潜っていたに過ぎなかったのか。

忘れたと思っていた彼に、良く似た少女に出会った。

彼女は彼と同じ年だった。

彼女は彼の双子の妹だと言う。

何の奇跡か。すると成長した彼が現れた。

男は度重なる偶然に、少し酔っていたのだ。少年の様なところのある男だった。久々の純粋な恋に、少年の真意すらよく見えていなかった。

偶然はもう一度起こるのではないかと、彼も想ってくれているのではないかと。

馬鹿な勘違いをした。

あまりに哀れ。

いつそ笑え。彼は偶然に愛された男だったのだ。いや、愛されたのは悪戯好きな魔法使いに、かもしれない。

男の心を一言で表せばこうだろう。

どうしてこうなった！

ようするに彼は、とても運が悪かったのだが。

たとえば、人魚姫の姉はどう思っていたのだろうか。

自分の髪を魔女に差し出してでも、妹を守ろうとした姉姫。姉妹で一番の美貌と褒め称えられる妹を、美しい自分の髪を切つてまで救おうとした。

その妹姫と言えば、異種族の叶わぬ恋に声を無くし、陸に上がり、やがて想いもむなく果てる。

姉姫はどう思っていたのだろうか。美しく純粋な妹。その最後まで悲劇的かつ、美しいものだったに違いない。

姉の犠牲と共に手に入れた短剣も、彼女は海に捨て泡になった。

姉姫はどう思っただろうか。悲劇にただ涙を流すか、それとも最後まで気がつかなかった王子を恨むか、それとも？

彼女の場合は三つ目の選択だった。

他でもない、今は亡き妹姫を恨み、なじったのだ。

彼女は自分がどうしたって手に入らないものを、生来持っていた。綺麗な心、綺麗な声、綺麗な体。

何の不満があるという。自分はいくら着飾り化粧を重ねようと、彼女の様にはなれないのだ。それを捨て、彼女は果てた。何も手にすることなく、ただ一人で満足して。

（ふざけるな！）

私だって人魚姫なのだ。立場は限りなく同じなのだ。なのに彼女は優遇されている。その好意をアレは、あっさりと海に捨てた。

その理不尽さ！

美しかった髪は短くなってしまった。年月を掛けて、いつかのためにと、伸ばした髪はもう無い。

犠牲はその無くなった髪の年月だけあった。彼女と共に育った年月だけあった。それをアレは、剣と命と想いとを全て海に捨てたのだ。

人魚姫の姉姫はどう思った？

さて、姉姫ならぬ、大野まことは、こうして、妹姫役を憎むようになった。

しかし今は違う。彼女らと王子が決別した今、もはや憎んでも、その相手はそこには居ないのだ。

ならばこうしよう。

大野まことの恋する男は、若く美しくもなければ、権力も無い男。ただ年不相応に、幼いだけの男である。

しかし彼女はそれで良かった。今は無理だろうと、こちらは若いのだ。何年でもかけて美しくなれる。可能性はいくらでもあるのだと信じた。

彼女は門を睨みつけ、そして、ベルを鳴らした。

結末が分かるのは、あと十五年後。

えん。

円：

最近、顔が大きくなったような気がする。

気のせいだろうか。鏡の前で、わたしは顎に手のひらを押し当てつつじつくりと自分を見つめた。

やっぱり。

アア嫌だ。何故だろう？太った？

嫌な気がしながら乗った体重計は、二週間前と変わらなかった。運動不足？

なんだろうなんだろう。

わたしはそう可愛い方でもないし、親からもらったこのお顔様はかわるはずも無いのだが、それでも一応お年頃。顔は小さい方がいいし、眼は大きくなりたいし、胸はそこそこ、眉毛がもっさりしてるのも嫌。

やだな。

わたしは憂鬱な気分で、顔サイドの髪を下ろし、前髪を上げた。女子の裏ワザだ。

むくみは水分不足だっけ？やだなあ。

女の子はある程度までなら、可愛くなれると思う。これに年齢はそう関係無い。

必要なのは、一に環境と、二に根性、三に努力で、四に妬み。

一、環境。これは極端に言えばお国柄。（ああ、そうだ、わたしはこれを世界単位で言っている。恐らくこれはどこでも等しい見解だ

とわたしは思っている)

つまり、その場に最も好まれる姿。これを知る。学生ならば協調性。社会人ならば清潔感。モデルさんなら格段上の美しさ。お母さんならば、華やかさよりも愛らしさ。

さらにこれには二つ目の意味もあるのだ。道具、もしくはそれを揃えることの出来るお金と店があること。これもまた『環境』である。二、根性と三、努力。

どこの熱血青春マンガの標語? いやいや、女の子の美については、男の子のプライドと同じだ。生活に受け入れてしまえば譲れるものでなく、さらには友情にまで影響する。ひいては人生に多大な影響を及ぼす。

自信の外見を自覚し、美を意識するのは(早ければ早い方がいいというわけではないが)ちゃんと知らねば恥をかく時というものが。女は二十五過ぎれば、スツピンで外を出歩けないのだ。

人間は視界に頼る生き物なのだから、それは礼儀としてちゃんとしなければならぬ。入口が汚い店には客は来ないのだ。外見と言うのは、コミュニケーションの玄関口である。

しかしそれを維持するのは大変なことだし、はつきり言って無理だ。そこで大事なのが、諦めない根性、積み上げた努力、というわけである。

さて、そしてその四。

妬み。

なんて嫌な字面だろう。女に石と書き、妬むと書く。女は身に石を持ち、妬む。

やだねえやだねえ。本当嫌だ。この顔のむくみと同じくらい。しかし女は、これを動力源にして美しくなる。

子供は愛と希望がお友達。大人は酒と肴がお友達。男はプライドがお友達。ならば女は、妬みとお友達。

友達は友達でも悪友で喧嘩友達だ。ヤなやつなんだが、共にいる。自分と言うコロニーの中に、必ず背を向け、端っこに居る。さらに



いえば眼が合うと物凄く嫌な顔をしてくる。

「こっちみんな」と、睨んでくる。それはなぜか？自分が嫌な奴だつて、自覚してるから。自分が居ない方がいいことが分かっている。嫌われてるのが分かつてる。だから眼が合うと無言で睨み、けん制しつつ、誰も居ない端に寄る。

可愛い奴ではないか。わたしは結構好きだ。妬みと言う感情は一匹狼なツンデレだ。ツンツンツンツン。たまに寂しくなって寄ってくる。これがデレ。

そう、妬みは寂しさと直結している。

羨み、自分に失望し、生まれる感情だ。「自分はああいうふうにならない。なりたい。うらやましい。でも無理だ。」そして「妬ましい」となる。

心が石になる。体も固く石になる。重くて硬くて固くてごろりと転がる。妬ましい。しかし女は強いもので、その柔らかで筋肉なんてまるで付かない体に、ダイヤモンドより固い部分を持っている。

女性はそれを拳に握り、妬みの石を打ち砕くのである。ちなみにこの拳、対男性に向けられる場合もあるので、くれぐれも女性の取り扱いには注意してほしい。

岩をも砕く石、ならぬ意思である。

女は妬みを乗り越え、負けるもんかと、美しくなる。ついでにその経験は拳に蓄積され、攻撃力も増すので男性はより注意が必要である。再三言おう。注意しろ。場合によっては命にかかわる。よく色男へ女に後ろから刺されるぞ注意しろ、と比喻する。妬みは大きく、固くなりすぎると、刃物のように尖るのだ。女はそういう強さももっている。

現代社会、美しくなる手段は本当に色々ある。特に日本はそれが豊富だ。目移りするほど豊富だ。いざとなれば美容整形と言う最終手段、リーサルウェポンもある。

この妬みから解放されるために、女は環境を整え、努力を重ね、根性で這いあがってくるのだから、恐らくこの感情は最も重要な機関

である。

女は石と言う名の固くて硬い、意思を持つ。

さて、しかし残念ながら、わたしはその妬みとは近ずとも遠からず、結構友好関係を築けていると思う。

それと言うのも、わたしは基本的に、妬みと言う感情は眺める側だからである。

わたしは人を妬まない。付かず離れず、遠くで見ている側の女の子だ。

リアルで妬みとう感情は醜く見えたものではなく、しかしわたしはその見た目よりも、性格と言う名の法則が好きなので、自分は妬みの感情を持たず、他の誰かさんの妬みを観察する。

趣味と言うには悪趣味すぎて大声では言えないし、言うつもりも毛頭無い。履歴書にも書けないなんちゃって趣味だ。

見ていて楽しいものではない。けっしてウキウキドキドキ胸躍りはない。ただそこに居るのを確認する、その行為が大切である。

安心する。世界はあまりにも色褪せて見える。物語の世界のように、溢れる色はそこには無いのだ。

世界は真っ白。どこを見ても変わらず同じである。妬みと言う感情は黒なのだ。伸びる黒い描線は、白いそこに初めて絵を、文字を描く。

もしそこに他の色が生まれたとしても、黒はどうやったって邪魔にはならない。どんな色に合わせても黒は美しいと思う。だからわたしは、その色を持つその感情が好きだ。

女が持つそれは、いつだって泣いている。

口惜しい、くやしい。

さびしい、寂しい。

なんでわたしは寂しいの。

寂しいのが、口惜しい。

そしてわたしは思うのだ。

（愛い奴め）

艶：

美人と噂の西藤ちゃん。

女の子のくせに、中学まで野球してたとか。男子二十人のチームメイトに女子一人。だからか、普段大人しいイメージだけど、ここぞという時は男子より男前に動く。意外に行動派。

ショートカットだけど、ちよつと全体的に長めなので、普通に女の子。かわいい。くせに、表情は少ないんだから。

たまに勘違いした男子とか寄ってくるんだよね。無口で無表情。ミステリアス。おとなしそう。

そんなことないよ。あの子、淡々と行動派だから。やるときややる子なのよ。凄いでしょ。アンタよりイイ男できるよ。

可愛いより綺麗。男顔ではないけど、中性的。基本的に女子に優しい。無駄に紳士。

・・・なんか王子様っぽい。

ねえアンタ知ってる？この人凄いのよ。綺麗なだけじゃないんだから。

顔のむくみはまだとれない。

というか、なんだろ。どんどん大きくなっているような・・・。

やだなあやだなあ。ホントやだあ。

そりゃさ。忙しいさ。これでも。

そんなもん？って笑われるかもしれんけども、わたしからしてみりゃ、精一杯よ。

なんとか髪型で誤魔化してるけど。うーん・・・これわたし可笑しいんじゃないの？

だって、三日でこんななる？っていうか、これむくんでるっていう

より、顔自体が大きくなってない？

やだわ。本当やだ。

やだなあ……。

ああ、顔のむくみ（？）はまだ続いてる。晴れてこのよくわからないものには（？）が付いた。

演：

ミヅキはいいやつ。かわいいやつだ。

一番、あいつ、妬みと言う奴に近い。つまるところツンデレ。可愛い。

短気だけど、姉御肌。かつこいいのものもある。見た目は日本人形みたいなのにさ、口を開くと姉さん。  
三人の中で一番小さいくせにね。

「なつちゃん、最近どうしたの？」

ミヅキが言う。

「おかしいよ、アンタ」

え？

……何が？

えん（？）：

【むくみ】

浮腫み。

顔や手足などの末端が体内の水分により痛みを伴わない形で腫れること。

漢字だと浮腫みか。……生々しいな。

辞書で引くんじゃなかった。なんかこわい。やだこれ。

いやでもかし、むくみじゃ、ないように見えるんだけどなあ……  
・うーん。まあわたしも成長期、顔くらい大きくなる、か？

怨：

その子はちょっとだけわたしに似ている気がする。

いいんちよと勝手に読んでいる人。わたしは彼女を心からの親愛をこめて、あだ名で呼んでいる。ここで大切なのは、あだ名の意味では無くあだ名で呼ぶこと自体である。

彼女もたぶん、世界が真っ白の人だ。ついでに黒が好きな人。

出来ればもっと親しくなりたい方なのだけれど、どうにもうまくいかない。ミヅキはそれを、「彼女は興味が無いから」だと言う。なるほど。ならば仕方がない。

彼女はわたしに興味が無い。彼女にはまたわたしも、真っ白の世界の住人に見えるのだろうから。

俺：

愛憎の無い愛は、愛ではないという。

妬みを持たねば嫉妬しない恋は愛にはなれんという。

ただの憧れ止まりである。と。

さて、ならばわたしのこれは、なんでしょう。わかりません。だからでしょうか。

そして彼は、いつのまにか旅立ったのです。

遠：

燕：

ある日、魔法使いはやってきたかの人は知っていたのでしょうか  
全て知っていたのでしょうか

魔法使いはうなずいて、ひとつ、魔法をかけました

魔法使いは少女に言いました  
「つぎはあなたがまほうつかいよ」

縁：

わたしにとって、貴方はクラーク博士でドジソン教授でした。  
さびしい。

くやしくはない。

ただわたしは、さびしかった。

妬みが留守の女は駄目ですかね？どうでしょうか。

だれか・・・いいえ、貴方がいいです。

先生、教えてくれませんか。

わたしは貴方の生徒です。

延

沿

援塩

淵

垣

炎

湾

鉛焰

厭

羨

縮

冤 涎

えん

得ん

獲ん

必要なのは、一に環境と、二に根性、三に努力で、四に妬み。

この四つを忘れなければ、女の子はある程度までなら可愛くなれると思う。何せ方法は色々あるのだから。女にはとっておきの裏技があるのだ。

さて、ちよつとした勘違いをしてみたい。今のわたしは魔法が使える（かも）しれない。ならば使おう。使うしかない。

これは妬みだろうか？妬みだろう。

こんな醜く愛しいものがわたしの中にある。素晴らしい。わたしは幸せである。

いやだがしかし、ツンデレな妬みと言う人物は、いざ自分の出番になると、うれし泣きか悔し泣きか涙が止まらないらしく、たいそうに苦しんでいる。ので、なるべく早くこの感情は拳で砕いてしまいたい。そうすればまた、彼は元の一匹狼なツンデレに戻るのでしょうから。

四つの条件を晴れて揃えたこのわたしは、五つ目に魔法を携えて奇跡を起こしに行こうと思う。

さて、最後に彼女を真似て雑学を披露しよう。

顔の大きい人は寂しがりなんだそうだ。なるほど、納得。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0680p/>

---

天の邪鬼と猫かぶり

2011年1月5日15時55分発行